



# 案山子



2013年冬号

新潟大学文芸部

# もくじ

---

## もくじ

### ■お題作品『しんねん』

「新年」	外衛 眞希	3
チェック	木材	4

### ■通常作品

変態	<b>Puney Loran Seapon</b>	6
<b>Fantasic Impromptu</b>	大山 廉	7
コップ一杯の世界	山中 和明	8
シェルター	//	9
デザイアリング（後編）	秋月 夢人	10
雨降り	晶城 氷夢華	11
結婚前夜	祐輝	12
エピローグ	雨宮 御波	13
ハートキャッチミラージュ	浦木 英智	14
廃線上の魔 ーdownwardsー	灰白湯	15

# お題作品「しんねん」

「新年」

外衛 眞希

去年今年自己採点の手は震ふ

遅れ着く見知る汚き字の賀状

指先の痛む朝(あした)や破魔矢捨つ

無人駅雪は吹きつけ手は震え握る賀状に宛て先は無し

年越しの除雪車の切り拓く道僕の未来へ繋がった途

【作者より】

小説間に合いませんでした。

姉「お前はもう、死んでいる……。た、たわばっ！」

弟「姉ちゃん何やってんの」

姉「見て分かる通りストーブで餅を焼いております。節穴め」

弟「節穴の基準すげえ安いな。ところで年賀状来た？」

姉「郵便屋さんは来たみたいだよ。取りに行ったら？」

弟「フフ、まあ今は大人しくパシられといてやるとしますか」

弟「うーひょひょい、年賀状来てたよー！」

姉「なんだやけに上機嫌だなすごい気持ち悪い」

弟「くくく、今の俺は無敵！ 何言われても効くもんかよ！」

姉「憧れのあのコから年賀状来てたとか？」

弟「な、何故分かった！ い、いや別にそんなことはないよ？」

姉「お前のその墓穴の掘りっぷりすごいと思う」

弟「でまあ、これが姉ちゃんの方で」

姉「ありがとう」

弟「そしてこれが俺の方だが、見るなよ！ 絶対見るなよ！」

姉「分かった、見ないようにする」

弟「俺はこれからちょっと書き初めの続きをしてるけど、特に一番上のは見るなよ！」

姉「あ、私の今年の抱負は『定期的にがんばる』でお願い」

弟「流石にそれは自分で書いて欲しい」

姉「しかし餅を焼くのはいいけど、網にくっついてならないな」

「何か紙を敷いたほうがいいのでは。えーと、チラシチラシ」

「おー、燃えるかと思ったけど別にそんなことはなかったぜ」

「よーし、焼けたぞー。次の餅カモーン」

弟「で、気付くとチラシの裏に俺の年賀状が張り付いてた、と」

姉「てへっ、メンゴメンゴ」

弟「ちょっと何が起こったのか俺よく分かんない」

姉「紙をストーブから下ろした時に張り付いたとかかな」

弟「えっ、分かんない」

姉「チラシの裏がミカンの汁でベタついているのがポイント」

弟「なーんだ、なるほどー。どうしてくれるこの格子模様！」

姉「チェック柄でお洒落なんじゃないかな？」

弟「お洒落もくそもねえ！ 姉ちゃんのセンスを疑う！」

姉「いやー、最初からそういう柄だったんじゃない？」

弟「文字の上からチェック柄かけるお洒落見たことねえよ！」

木材

あとがき

私が過去のお題作品「チェック」で書いた話を皆さんが見ているということは、私の本命は締め切りに間に合わなかったのでしょうか。この悲しい輪廻を繰り返さぬよう、この手紙は海に

## 一般作品

変態

Puney Loran Seapon

「.....そうですか、分かりました。お忙しい中、ありがとうございます。」

そう言って、新米刑事の木村(きむら)勇氣(ゆうき)はマンションをあとにする。この近くで変質者が出たので、彼はその捜査にあたっているのだ。だが、通報があってから今日で五日目、一日一人ずつ、計五人もの人間が被害に遭っているにもかかわらず、手がかりは何一つない。被害者の証言によると、夜だったので、顔はよく見えなかったが、変質者は典型的なトレンチコートタイプの男だそう。現場は毎回このマンションの近くなので、いい加減何か手がかりが見つかったも良さそうなのだが。

朝から飲まず食わずで聞き込みをしていたので、流石に腹に何かを入れないと倒れそう。そう思った勇氣は、近くの公園で、昼食をとることにした。

「さあ、僕を踏むんだ！ いや、この卑しい僕を踏んでくれ！」

公園の近くまで来たとき、勇氣の耳にそんな叫び声が聞こえてきた。聞き覚えのある声なので、慌てて公園まで走る。公園のど真ん中で、男が小学生と思われる女の子に土下座していた。

「.....貴様、捜査中に何をしているんだ？」

土下座しているのは、勇氣の同僚の、佐々木(ささき)康(こう)介(すけ)太っているせいなのか、かけているダサい丸縁メガネは白く曇っており、髪の毛もだらしなく伸びきっているが、こんな奴でも警官だ。通称『ブタ』と呼ばれている。しかし、実はブタはかなり清潔で、知能も高い。不潔に思えるのは人間の偏見だ。そのため、彼のことを『ブタ』と呼ぶのは、ブタに失礼だろう。

「見て分らんのかね！ 彼女に踏んでもらいたくて、土下座しているのだよ！」

「なら、俺が踏んでやらあ！」

そう叫ぶと、勇氣はブタ.....じゃなくて康介の頭を思いっきり踏みつける。康介の頭が、地面にめり込んだ。

「勇氣君.....ちょっ.....ちがっ.....」

「お嬢ちゃん、ごめんね。さあ、ここには変なおじさんがいるから、遊ぶなら向こうで遊んでくれるかな？」

「はあーい！」

元気よくそう言うと、女の子は康介の頭を軽く踏んづけてから、向こうへと走っていった。

「さて、お前はこっち来い」

「うごっ.....」

そう言うと勇氣は、康介を、公園の入り口近くのベンチまで引きずっていった。



「一体君は何を考えているのかね！」

ベンチに座った途端、康介は勇気に食って掛かる。だが、それは勇気の台詞だろう。

「いや、不審者から女の子を守っただけだが？」

「違う！ 文句があるのは、君のさっきの踏み方のことだよ！ いいかね？ 人の顔を踏む時は、相手のほっぺの真ん中辺りを、自分のつま先や踵でグリグリとするのが正しい踏み方だ。頭の上から踏むなどとは、言語道断！ 君のせいで、さっきの女の子が間違っ覚えてしまったではないか！ どう責任をとるつもりかね！」

「いや、責任をとる必要はないだろう。と、いうか、いい加減にしないと、そろそろセクハラ等の罪で訴えられるぞ？ お前、昨日近藤さんのデスクの上にあったペットボトルをラッパ飲みしていただろう」

『近藤さん』というのは、警視庁一の美人さんである。そんな人のペットボトルをラッパ飲みするとは、なんという奴だろうか。

「この間は更衣室の壁に覗き穴を開けようとしていたし、その前は酔った勢いで高橋さんの体にベタベタと触っていたし、そして一ヶ月くらい前は……」

「ええい、五月蠅い！ 奈津(なつ)美(み)と別れた僕の気持ち、リア充の君に分かってたまるか！」

奈津美というのは、康介の元カノで、勇気も何度か会ったことがある。少し気が強いが、中々可愛らしい子だったと勇気は記憶している。と、いうか、こんな男にも彼女はできるのか。

「いや、リア充だと言われてもな。少なくとも、お前が思っているような意味合いでのリア充ではないぞ？ 彼女いないし、できそうな予感もしないからな」

「では、そのお弁当は何かね？ 君の幼馴染の、奈津美と同じくらい可愛いまゆみさんが作ってくれたお弁当ではないか！」

康介は、勇気の膝の上に広げられたお弁当を指差して叫ぶ。

「いや、たしかにまゆみのやつが作ったお弁当ではあるけど、それは親が出張で中々帰ってこれないのを心配したまゆみが、ぐーたらな姉貴と、まだ小学生の妹の代わりにご飯を作ってくれているだけであって、俺のは二人のついでだぞ？」

「嘘をつくな！ 前に君の家に遊びに行って夕飯をご馳走になったとき、まゆみさんが君に向かって『べ……別にあんたのために作ったわけじゃないんだからねっ』とっていたではないか！ 典型的なツンデレだ！ それに君のお姉さんは所謂『電波系美少女』だし、ロリ全開の妹は甘えん坊で君にべたべたしている！ そんな素晴らしい美少女達に囲まれて、これをリア充と言わずに何と言う？ 一番許せないのは、君の妹が、君の……君のことを……うっ、うう」

康介の頬に涙が溢れた。別にそこまでのことでもないだろう。

「『おにいちゃん』だと！ あえて『にい』言わずに『にい』と言うところが心憎い！ あの発音にここまで『萌え』があるとは知らなかった！ 萌え度パネェ！ 勇気君みたいなリア充爆破しろwww」

「いや、なんだよそのダブリューダブリューダブリューってのは！」

「なんだ、ネット用語を知らんのか？ 『笑』を略したものだよ」

「少なくとも現実で使う言葉じゃないのはわかった。と、いうかブタ！ 誰が爆破しろ、だ！ お前が爆破しろ！」

「ブ……ブタだと！ 言ったな！ 親父にも言われたことないのに！ それに僕は飛べないから、ただのブタじゃないか！」

版権の仕組みが、調べてもあやふやでよく分からないのだが、今の康介の発言は危ない感じがする。

「ただのブタじゃねえ！ 変態ブタだろうが！ 自覚持て！ と、いうか、そろそろ捜査に戻るぞ！ ブタもさぼってないで仕事しろ！」

「ま……またブタって言ったな！」

こうして、言い争いを続けたまま二人は公園をあとにした。

「……そうですか、分かりました。お忙しい中、ありがとうございます。はあ……」

勇気の口から、溜息が漏れる。場所はさっきのマンション。かれこれ三時間、聞き込みを続けているが、未だに大した手がかりはない。まあ、溜息の理由はそれだけではないのだが。

「……っすか。……りました。……あざっす」

康介の口からは、駄目な若者の返答の典型的な例が聞こえる。『ありがとうございます』くらい、ちゃんと言うべきであろう。

「あのブタ野郎……」

放っておくと、またさぼりそうなので、一緒に聞き込みをすることにした勇気だが、彼の判断は間違っていたと言わざるを得ない。警察の印象を悪くするだけだ。

注意しようと、勇気が康介に近づこうとした時だった。

「そうですか！ いや一助かりました。ありがとうございます！」

後ろから聞き覚えのある声がしたので振り返ると、白衣を着た男が主婦に向かって頭をさげていた。彼は科捜研の古谷(ふるや)藤二(とうじ)。勇気の中学時代の友達だ。一体彼は何をしているのだろうか？

「おい、藤二。何やってんだ？」

「あれ、勇気君かい？ いい天気だね」

「藤二、質問に答えろよ……」

「やだなあ勇気君。『藤二』なんて水臭いじゃないか。昔みたいに『TOUJI』って呼んでくれよ。」

「一度もそう呼んだことはねえよ！ 『呼ぶ』つつうか、『読む』の間違いだろう。音的には同じだ！」

「全然違うよ。『藤二』の場合は『とうじ』で読むけど、『TOUJI』の場合は『ト・ウ・ジ』っていう風に音を溜める感覚で」

「いや、意味わからん」

ところで、本当に『TOUJI』いや、藤二はここで何をしているのだろうか。

「藤二。本当に何やってんだ？」

「君たちの手伝いさ。変質者の事件の聞き込みだよ。」

「科捜研の仕事じゃねえだろ。職場戻れ」

勇気の言うとおりで。科捜研には科捜研の重要な仕事がある。それをほっぽらかすとは、職務怠慢もいいとこだ。

「勇気君、『天才は時として、何もしない方が良い結果につながる』という名言を知らないのか？」

「知らねえよ！」

『名』言というよりは『迷』言だ。結局のところ、彼はたださぼっているだけである。

「おやおや、誰か知っている人の声がすると思ったら、『TOUJI』君じゃないか。久しぶり。( ㄟ )」

話し声が聞こえたのか、康介が聞き込みを中断して勇気達の方へやってきた。

「ブタ、だからネット用語を現実で」

「やあ康介君。久しぶり」

藤二が勇気の発言の上からかぶせるように康介に挨拶する。どうやら二人は知り合いらしい。

「おや『TOUJI』君。勇気君と知り合いなのかい？ (x・ん・)?」

「ああ。中学時代の友人さ。君も勇気君の友達だったんだね？ 知らなかった」

「うむ、同僚だ。よかったら、中学時代の彼の話をして聞かせてくれないか？ (^人^)

」

「よし、じゃあこの近くの喫茶店でどうだろう？ 彼の調子に乗りすぎて恥ずかしさ満載の中学時代を、面白おかしく話してあげよう」

「いや、ちょっと待て！ 仕事しろよ！」

楽しそうに話しながら喫茶店へ向かおうとする二人を勇気は慌てて引き止める。

「勇気君。仕事仕事と五月蠅いなあ。人生には遊びも必要なんだぜ？」

笑顔で藤二はそう言った。

「それは仕事を頑張ったやつに言う台詞だろう。さぼってるやつが言う台詞じゃねえ。ところで、お前のさっきの主婦に対する発言が気になったんだが、もしかして何か掴んだのか？」

「ああ。変質者の特徴を話したら、一昨日の夜、それっぽい人見たってさ」

「は……早く言えよ！ どんな奴だっ！」

「こらこら、何にでもすぐ答えを求めるのは、現代人の悪い風潮うごお……」

「いいから早く話せ」

勇気が藤二の首を締める。

「わ……分かった、は……話すから……」

藤二が両手を上に挙げたので勇気は手を離す。藤二はさっきの主婦から聞いた話を、勇気に話し始めた。

「……じゃあ彼女は、このマンションの一階に住んでいる浦田ってやつが、真夜中にトレンチコートを着て、出かけるのを見たんだな？」

「あ……ああ」

「よし、ブタ、藤二、今からその浦田ってやつのところに行くぞ！ 重要参考人として引っ張ってやる！」

「む？ 勇気君、今からかね？」

「康介君の言うとおりでよ。犯行は毎回真夜中に行われているんだから、それまで待ってもいいんじゃない？」

かっこよく台詞をきめた勇気に対するアホ二人。当然である。目撃証言があるのだ。これ以上被害者を出さないためにも、さっさと引っ張るべきだろう。と、いうか、この二人は仕事をさぼりたいだけに違いない。

「バカ野郎、さっさと浦田ってやつに……」

その時、マンションの外から、女性の悲鳴が聞こえた。三人は慌ててマンションを出る。

「も……もしや……」

勇気は、嫌な予感がした。

「大丈夫ですか？」

女性はマンションの出口のすぐそばで泣き崩れていた話を聞くと、勇気の予想通り、トレンチコートを着た男が、彼女の前でコートの前をひろげたそうだ。警察が来る音を聞いて、慌てて逃げたらしい。女性は男が逃げた方を指差した。

「まだそう遠くへは行ってないよねえ」

「うむ、急げば追いつける。(°▽°)」

と、二人はそう言った。藤二はともかく、康介は無理だろう。……体型的に。だがここで、藤二が真面目な顔をする。

「……康介君。前々から気になっているんだけど、君のその喋り方、直した方がいいんじゃない？」

「おっ、藤二、いいこと言うじゃん。この切羽詰ってそうな空気で言う台詞じゃねーけど」  
だがここで、藤二は太陽のような笑顔を見せた。勇気には、嫌な予感しかしない。

「もっと斬新な感じがいいんじゃない？」

「KONNNAKANNJIKAI? (メ・ん・)? SAA HAYAKUIKOU!」

「いや、違うだろ！ つーか、かっこわるっ！ なんでローマ字なんだよ！ 余計分かりづらいわ！ せめて英語で話せよ！ そもそもこんなことしている暇ねーし！ 早く犯人追うぞ！」

勇気はそう怒鳴って、犯人の逃げた跡を追った。

「待てごらあ！」

遅らく犯人である浦田の姿を見かけた勇気は、そう叫びながら犯人を追いかける。だが、待てと言われて待つ犯人はいない。それでも待てと言ってしまうのは、なぜだろう？

「い……いやだあああ！」

「五月蠅い！」

そう叫んで、勇気は浦田に飛びついた。

「うわあああ！」

「よっしゃ、捕まえ……うごはあ！」

地面に浦田を押し付けた勇氣だったが、腹に蹴りを入れられて、思わず押さえつけていた手を離してしまった。

当然、その際に浦田は逃げる。だがその行く手を、藤二と、まさかの康介が阻んだ。康介は体型的に無理そうだったと思うが、どうやら全然そんな事なかつたようだ。

「ぐ……しまった！」

「ふっふっふっ、先回り作戦、成功！ どうだね、勇氣君」

康介が、ドヤ顔で勇氣を見下ろした。

「よくやった、藤二、ブタ。さあ浦田、もう逃げられんぞ？ 大人しくするんだ」

「嫌だ！ 全世界に僕の美しい肉体を見せつけるまで、僕は捕まるわけにはいかない！」

「一体、何が君をそんなに駆り立てるんだい？」

藤二が、当然の疑問を浦田に尋ねた。

「僕は……僕は目立ちたいんだよ！ 脚光を浴びたいんだ！」

「やめろ、そんなことをしても、誰も君になんか注目してはくれないぞ！ 愚か者として、人の目を避けるような生活をしなければならないんだ！ それでもいいのか！」

「誰も注目してくれない？ だったらこれを見ろ！」

そう叫んで、浦田は着ているトレンチコートを脱いだ。これは男の前でやる行動じゃないだろう。勇氣は頭を抱える。

「ば……馬鹿な……！」

「こ……これは……！」

勇氣が顔を上げて見ると、康介と藤二は、衝撃を受けたような顔で浦田の体を見ていた。だが、二人は勇氣と違って、脱いだことに対するショックを受けているわけでは無いようだ。衝撃の発言が二人の口から漏れた。

「う……美しい……」

「こ……これは、生けるダビデ像……！ いや、ダビデを超えている！」

「ダビデ超えキター(°▽°)ー！」

「この世にこんな美しいものがあつたとは！ かはっ！」

「お前ら……正気か？」

地面に手をつく二人を見て、勇氣が冷ややかな目線を送る。確かに腹筋は引き締まっているが、それ以外に特筆すべき事は何もない。衝撃を受けるほどじゃないだろう。藤二に至っては血まで吐いているが、一体何があつたのだろうか？

浦田はトレンチコートを着直して、二人の間を抜ける。

「何やってんだお前ら！」

「待ってくれ浦田！ その腹筋で僕にボディープレスを……」

「馬鹿っ！ 早まってんじゃねーよ！」

血迷う康介を、勇氣は怒鳴り、康介の頭を踏みつける。

「さっさと追いかけんぞ！」

「す……すまない勇氣君。僕たちは立ち上がれそうもない。君一人で追いかけてくれ！ これを持っていくんだ！」

藤二はそう言って、白衣のポッケから、時計を取り出し勇氣に投げた。

「僕の知恵と技術の総力を結集した発明品だ。その名も、『時計型銃』だ！」

「なんかすげーパクリ臭がすんだけど？ 版權とか大丈夫か？」

「使い方は、文字盤のとこの照準スクリーンを上げて、狙いをさだめ、脇のスイッチを押せ！ 一日一発限りしか撃てないから、絶対に外すなよ？」

「使い方までそっくりだな！」

「早くしろ！ 浦田が逃げてしまう！」

「分かったよ！」

そう言って、勇氣は時計を腕につける。そして、照準スクリーンで狙いを定めた。『銃』というくらいなので、モロに当たったらまずいだろうと思った勇氣は、浦田の足のあたりを狙うことにした。そして、スイッチを押した。

ズキュウウウウウン

そんな音がして、浦田の目の前の地面が爆発した。その威力に吹っ飛んだ浦田は無事だったが、地面には大きなクレーターが出来ていた。

「うん、完璧！」

藤二は満足げに頷く。

「いや、『完璧！』じゃないだろう！ 人間相手に使う道具じゃねえ！ どーすんだ、あれ！」

「始末書(ry)」

衝撃から立ち直った康介が、勇氣の肩にポン、と手を置く。だが、始末書だけでは済まないだろう。

だが、何はともあれ、浦田は無事、公共わいせつ罪の現行犯で逮捕され、事件は幕を閉じた。

### 【あとがき】

お久しぶりです。 Puney Loran Seaponです。製本版を購入されていない方は、本当に久しぶりですね。

今回はコメディイを書きました。プライベートでも、たまにコメディイ色が少しだけ強い作品を書くことがあるので、書く前は、「コメディイなんて簡単楽勝！」などと思っていましたが、いざやってみると、何と難しいことか。自分以外の人を笑わそうとするのって、非常に難しいんですね。コメディイ作家やお笑い芸人の偉大さに気づかされました。

一応、下ネタ表現には、これでも大夫気を使ったつもりですが、気分の悪くなった人、本当に

申し訳ありません。

次回は、恋愛ものを書きましょうかね？ それでは、また！

Fantasic Impromptu

大山 廉

ようこそ、ミスター・フォーサイス。ごめんなさい、遠いところからわざわざ来てくださったのに、あの人が、今出かけてるんです。どうぞ、あの人が帰るまで、中でお待ちくださいな。

ふふっ。ミスター・フォーサイス、あなたまで何をおっしゃっているの？ ジョークをおっしゃるなら、わたくしのような盛りを過ぎた女より、可憐なプリムローズのような娘の方がふさわしいのではありませんこと？

あの人は、アンドリューと一緒に狩りに行っているんですよ。ほら、あなたも覚えていらっしゃるでしょう？ 星のきらめく夜空みたいな、つややかな毛並みの美しいシェパード。力強い四肢で風のように走る姿は、まるで弾丸のよう。ほら、そこのテラスのフランス窓が開いているでしょう。あの人は、いつもそこからアンドリューと出かけるの。

まあ。ミスター・フォーサイス、お顔が真っ青ですわ。今、熱い紅茶をお持ちいたしますわね。きっと気分がよくなるわ。私の淹れる紅茶はとてもおいしいって、あの人もほめてくれるの。

あら？ 窓が開まっている。どうしてお閉めになったの？ あの人が帰って来られないじゃありませんか。

お寒い……？ うふふふっ、ミスター・フォーサイス、あなたはとても寒がりですわ。いらっしゃるのね。今は、みずみずしい若草が萌えるうらかな春の午後だというのに。

もう。今日は来るお客さま、みんなおかしいことをおっしゃるんだから。あの人はアンドリューと狩りに行っていると、何度も申し上げているのに。あんまり女をからかうものではありませんわよ。

ああ、おいしい。ミスター・フォーサイスも、どうぞ召し上がって。あら？ カップが空っぽ。もうお飲みになったの？ そんなに急がなくても、紅茶はまだありますわよ。今、お代わりを――あら、もういりませんか？ 遠慮なさないで。そんなにがたがたと震えているんだから、熱い紅茶を飲んで温まればいいのに。

まあ、もうお帰りになるの？ もう少しであの人が帰って来るのに……ほら！ 噂をすれば、ですわ。あの人が帰って来た！

こら、アンドリューったら！ お客さまの前なのにそんなにはしゃいで！ ああ、おかえりなさい、あなた。お客さまがいらしてますわよ。こちら、ミスター――あら？ ミスター・フォーサイス？ ミスター・フォーサイス？ もう、どこに行かれたのかしら。

あなた、ミスター・フォーサイスって、おかしい方なのね。こんなにあたたかいのにがたがたと震えて、あなたのお葬式に来たなんておっしゃるのよ？ 笑えないジョークだわ。あなたはまだ



生きてるのに。ねえ、アンドリュー？

さあ、窓を閉めましょう——まあ！ ミスター・フォーサイスってば、あんなところを走って……本当に、おかしい方ね。おや、転んだ！ まあ、まるで地を這う芋虫のよう！

あら、あなた、雪が降ってきたわ！ こんなにあたたかいのに。本当に、おかしい日。でも、春の雪って、とてもロマンチックな響き。ねえ、あなた。そう思わなくて？

あら？ あなた？ アンドリュー？ もう、また狩りに出かけたのね。よく飽きないこと。

さあ、あの人がいつ帰ってきてもいいように、窓を開けておかなくちゃ——

あとがき

もっと上手な文章が書きたい、と切に願う今日この頃です。大山廉と申します。

イギリスの小説家、サキの『開いた窓』が元ネタです。某作家の某作品経由で知りました。ぜひ読んでみてください。某作家の某作品でなんだよ！ というそのあなた。大山にまでご一報を。喜んでお貸ししますぜ。

コップ一杯の世界

山中和明

一人の少女が道を歩いていた。すれ違う人々は好奇と驚きが混じった表情をして彼女を眺めていく。この街の人々は生まれてこのかた綺麗な服というのを見たことが無かった。暖かい子宮から脱出すればすぐに人々の服も肌も、灰と泥と糞で汚れてしまう。透き通るほど白い肌を持ち、おろしたてのような服を着て、淀みのない瞳を輝かせ、よく磨かれた靴を、躊躇なく汚水と馬糞にまみれさせながら道を進む彼女を見て、街の人々はその額に天使の印を認めた。そして人々の比喩的な読みは実際に当たっていた。彼女は本物の天使だった。街に突き刺さるいくつもの煙突の上、そこから流れだす、人々が炉に投げ込む炎と石炭によって発生する黒い雲の上、空の海のそのまた上の世界で、高貴で優雅な生活を営む、カヲルはあの天使なのだ。地上に降りるために少女の姿をしているが、抑え込まれた無垢の光はわずかな隙間から漏れ出て、街の人々を不思議に魅了する。カヲルはこの薄汚い街を、優しく微笑みながら進んだ。

カヲルはおんぼろのアパートメントに入っていった。軋む床を進み、一室の扉を叩いた。扉はすぐに開いて、ゆったりとしたスカートを履いた中年の女性が顔を出した。「カヲルね？」と女は言い、カヲルは頷いた。二人とも、嘘混じりけのない笑みを顔に浮かべていた。カヲルが部屋に入ると、椅子に座っていた二人が立ち上がって、カヲルに挨拶した。

「カヲルね？ 待っていたわよ」とブロンデンが言った。ブロンデンは聡明で美しい女性だった。カヲルはブロンデンと握手した。次に「カヲル。僕がハンスだ。会えて嬉しいよ」とハンスが言った。ハンスは目の落ちくぼんだ、物心ついた時から心に暗いものを抱えこんでいる男性だった。それを彼は、青年時代に習得した明るい性格と軽いジョークで誤魔化していた。カヲルはハンスとも握手を交わした。ブロンデンとハンスは、ビリーより年を取っているが、ビリーのよき友達だった。最後にビリーの母親がカヲルと抱擁し、彼女は瞼のふちに溜まった涙を人差指でなぎ払った。そしてカヲルと目をしっかり合わせて頷いた。部屋の隅に置かれたベッドに近づき、そこに横になっている少年に声をかけた。「ビリー、ビリー、聞こえる？ カヲルが来てくれたのよ」。

みんなベッドの周りに集まって、熱にうなされるビリーを囲んだ。ビリーは目を閉じ、夢の世界に閉じ込められ、血を沸騰させながら、胸の内側に潜む病魔と闘っていた。眉間にある皺は戦いのさなかについた傷のようだった。ビリーはまだ小さな子供だった。ベッドの側には、冷めた水が入った桶とタオルが置かれていた。それですいさっきビリーの熱い体を拭いてやったばかりなのだ。その後すぐに吹き出した汗の一粒一粒は、ビリーの弱った魂から搾り取られた命の果汁のようだ。

カヲルは手をそっとビリーの額に置いた。みんな固唾を飲んでそれを見守った。カヲルの華奢な手の下で、血管がびくびくと微かに痙攣している。カヲルは胸に手を移動させた。心臓が、ビリーの小さな心臓が、その下で鼓動している。カヲルはビリーの服をめくって、耳を押し当てた。血が勢いよく流れる音が聞こえる。心臓はさらに力強く鼓動して、自身の存在をカヲルに

知らしめようとする。俺はここにいる、俺はまだここにいるぞ！ カヲルは耳が焦げているような気がしてくる。目を閉じて、さらにビリーの奥深くを探ると、心臓の下に、腐った肉の塊が、心臓に触手を伸ばして寄生して、怠惰的に鼓動している音が聞こえる。カヲルの挙動を注意深く見守る者たちは、カヲルがビリーに巢食う魔物に迫っていることを感じて、緊張した。カヲルは突然ぱっと顔を離すと、ビリーの胸にキスをした。その瞬間、馬車の車輪がものすごい轟音を立てながら、涎を撒き散らして固い蹄を打ちつける馬たちに引っ張られ、部屋に迫り、そして部屋の影にうずくまっていた一人の男、人の目には見えない、人を怯えさせる闇の生物にぶつかり、轢き殺していった。三人は、純白の羽を背中から生やして自ら光を発する可憐な天使の姿を、衝撃とともに見出した。少年の体はびくりと震え、母親が肩に手をのせて呼びかけると、うっすらと目を開けた。

「……カヲル？」とビリーはかすれた声で言った。

「そうだよ、カヲルだよ」とカヲルは答えた。

「夢の中であったね。君は本当に天使なの？」

「うん、私は天使だよ。本物の天使だよ。だから、ビリーや、ビリーのお母さんや、ブロンデンやハンスに、あらかじめ夢で挨拶しておくことができたんだ」

「僕の病気を治すことはできないんだね？」

「うん。残念だけど、それは天使でもできないことなんだ」とカヲルは悲しそうに答えた。

「でも、天使は小さな幸運を呼び寄せることができるわ」とビリーの母親が必死に笑みを作りながら、震える声で言った。

ビリーは頷いた。

「ビリー、これから僕ら、遠くの街に行ってくるよ。お前の好きなお菓子を買ってきてやるんだ。ほら、一か月前、トニー爺さんがお土産に買ってきてくれて、お前が喜んで食べていたあのお菓子だ」

「ありがとうハンス。どれくらいかかるのかな？」

「三日よ。三日たったら帰ってくるわ」

ビリーはブロンデンのほうを見て微笑んだ。

「馬車で行くの？」

「そうよ。馬車で」とブロンデンが答えた。

「心配だな。少し前に馬が暴れて死んでしまった人の話を聞いたよ。馬車選びには注意してね」

「大丈夫だ。カヲルと一緒に来てくれるんだから。きっと全てが上手くいってくれるさ」とハンスがビリーの心配を朗らかに笑い飛ばした。「お前はしっかり休むんだ。無駄な心配はするな。僕たちは三日後に帰ってくる。それまで、無理はするな」

「ビリー、沢山のお菓子を食べれば、きっとすぐに元気になれるわ」とブロンデンが言った。

ビリーは頷くと、「カヲル」と呼びかけた。「綺麗な服を着てるね。天使はみんなそんな綺麗な服を着ているの？」

「天使はみんな神様から服を貰えるの。それぞれの天使に合わせた、特注の服を。綺麗な服だし、それに神様の裁量だから似合わない服を貰う天使なんかいないんだよ」

「いいな。羨ましいな」とビリーは言いい、天井に目を向けて、恍惚の表情を浮かべながら、しばらく黙った。

「母さん」とビリーが言った。「ちょっと疲れた。また眠らなきゃいけないみたいだ」

「眠れば具合も良くなるわ。ぐっすりお休み」

「みんなともう少し話していたかったんだけど」とビリーはすまなさそうに言った。三人はビリーにおやすみを言った。

「カヲル」とビリーは言った。カヲルは優しい目でビリーの視線を受止めた。「僕は眠るよ。次に目が覚めたときは、すっかり元気になって、お腹いっぱい食べたり、思う存分走り回れるようになっているかな？」

「眠って」とカヲルは微笑んで言った。「きっとそうなる。だから、ビリー、怯える必要なんてないよ。ビリー、眠って……」

ビリーは微笑んだ。微笑んだまま、目を閉じた。安らぎの表情は、ビリーが眠ってしまっても、しばらく消えなかった。

「カヲル、ハンス」とブロンデンがそっと呼びかけた。三人は母親に向かって頷きかけると、部屋から出た。

「この通りを抜けたところに馬車を待たせてあるわ」とブロンデンが言った。集合住宅に挟まれた通りは狭く、人気が少ない。前方から、男どもの騒がしい笑い声が聞こえた。街のやんちゃな機械工の青年たちが、汚れた作業着を着て、こちらに向かってきていた。彼らは見習いで、親方にこき使われ、理不尽に叱られ、溜まった鬱憤を大声に乗せて話していた。カヲルはその中の一人をじっと見つめた。それに気付いたハンスが、さりげなくカヲルの肩を叩いたりして気を逸らそうとしたが、カヲルは憑かれたように視線を動かさなかった。その一人が仲間から目を逸らして、カヲルを見た。笑顔は消え、冷たい表情になった。三人と見習いたちがすれ違うとき、やっとカヲルは前方を向いた。「おい」と見習いが荒っぽい声で言った。それはカヲルが見つめていた男で、この見習い集団のボスだった。

「見ない顔だな、え？ それに上等の服を着ている。いいとこのお嬢ちゃんか、あんた？」

「あなたには関係ないわ」とブロンデンが睨みをきかせて言い、立ち止ろうとしたカヲルを押し、そのまま通りを抜けようとした。

「待てよ」と男が言い、彼の子分がはやし立てた。「先にちょっかいをかけたのはそのお嬢ちゃんなんだぜ」。カヲルの腕を取って、振り向いたカヲルの頬を、彼は触ろうとした。

「止めろ」とハンスがその手を払いのけ、カヲルを引き離すと、男は急に殺気をみなぎらせ、ハンスを睨んだ。

「痛い目にあいたくなきゃ、消えろ。俺はこのお嬢ちゃんに用事があるんだ」

「こっちは用なんてないわ」とブロンデンがきっぱりと言った。

男はポケットに手を突っ込むと、そこから小さな銃を取り出して、それをブロンデンにつきつけた。ブロンデンはすぐ目の前で黒く光る銃を怯まない目で見つめた。ハンスはカヲルを引っ張って、自分の後ろに行かせた。

「もう一度はない。そいつを置いて、消えろ」

「あなた、銃なんて撃てるの？」

「もう一度はないって言ったよな？」

「あなたは銃なんて撃てっこないわ」

「馬鹿にするな」と男は叫んだ。それは突発的な怒りだった。すぐに彼は冷静になって、にやつきながら言った。

「俺は昨日、汚い犬を一匹殺した。こいつでな」

「犬と人間は違う。あなたは撃てない」

「試してみるか？」

「撃てば、あなたは変わるわよ」

男は湿った指をほどいて銃を持ち直した。「俺は変わらない」

「いいえ、変わるわ。間違いなく、決定的に、救いようがないくらいに」とブロンデンは軽蔑の表情を浮かべて言った。

男の瞳の奥で情欲の炎が這いずり回っていた。それはカヲルに向けられたものだ。男はハンスの後ろから顔を覗かせるカヲルを、しきりに盗み見ている。男の持つ銃は一つの黒い物体として独立していた。それは取り巻きの人々の感情の荒波にのまれず、何ものにも属さず、ただ冷然としてそこにある。カヲルには銃だけがこの世界からぼっかりと浮かび出ているように見える。

男が、人差指を折り曲げた。弾は発射され、乾いた音が響いた。ブロンデンは、男の懐に飛び込み、腕を横に押して、銃の向きを壁に向け、軌道を逸らしていた。銃弾は壁にめり込んで止まった。腰にある小さなナイフを鞘から抜くと、それを男の脇腹に突き刺す。男はウツとうめき声をあげ、ブロンデンがナイフを引き抜くと、吹き出した血が服を染めていき、男は転び、脇腹を抑えながら、汗をだらだらと流し、苦しみだした。

見習い仲間たちは茫然としていた。衝撃的な出来事があまりに突発的に発生したので、脳の連絡回路が必要な情報の全てを未だ運びきれていないのだ。ブロンデンとハンズ、カヲルの三人は、その隙に通りを走り出て、待っていた馬車に乗り込んだ。

村に着いたのは夜中だった。カヲルのおかげか、馬たちは調子を崩さなかったし、御者も長時間労働に対してそれほど文句を言わなかったし、ブロンデンもハンズも、固い椅子に反発されながらも、それほど尻が痛まなかった。三人は伸びをして、村の旅館に入った。旅館の従業員たちが、質素な広間につけたされた装飾品の下で忙しく立ち回っていた。その飾りは昼間に付けられたもので、村人の精一杯さが伝わるが、旅館の簡素さ、惨めさがさらに強調される形になってしまっている。だが、旅館にいる気早な村の若者たちは一向に気にせず、陽気に騒いでいた。明日は村の教会で結婚式が行われるのだ。披露宴の会場はこの旅館だ。旅館で働く、村一番の料理人が腕を振るう。

「部屋は開いているかな？」とハンズが主に聞いた。

「開いているよ。あんたたちは幸運だ。いつまでいるのかね？ 明日は結婚式だ。ただでメシが食えるよ」

「私たちは村の生まれじゃないよ」とカヲルが言った。

「誰だって大歓迎なのさ、この村ではね」と主は陽気に言った。

三人は広間ですぐに夕食を食べた。昼食は馬車の中で簡単に済ましている。三人ともお腹が減っていたのでよく食べた。

三人は一緒の部屋に泊まった。ベッドが一つしかなかったので、ハンスは毛布を床に敷いて寝て、ブロンデンとカヲルがベッドを共有した。

(なんだろう。ブロンデンはいい匂いがする)とカヲルは思った。(天上では絶対に嗅げない匂い。地上の、泥臭いものにまみれて、でもそれに飲み込まれずに、さらに一層気高くなる匂い)

「カヲルが側にいると安心するわ」

ブロンデンはさすがのようにカヲルを抱きしめた。カヲルはブロンデンに身を寄せた。

「ブロンデン、不安なの？」とカヲルは聞いた。

「不安よ。でもあなたが側にいてくれれば大丈夫」

「天使はいつも地上を見てくれているのかい？」とハンスが聞いた。

「みんなじゃないけど。でも、ときどき、憑かれたようにじっと見ている天使もいる」

「あなたはその中でも飛び切り優しい天使なのね。羽を捨てて降りてきてくれたんだから」。ブロンデンはカヲルの繊細な髪を撫でた。カヲルは俯いた。

朝、カヲルが目覚めると、ブロンデンとハンスはもう広間へ朝食を取りに降りてしまっていた。カヲルが行くと、テーブルを挟んで、二人は話している。誰も邪魔できない、二人の心の交信に干渉することができない、不思議な空間がそこにあった。カヲルはその空間の感触を確かめるようにゆっくりと近づいて行った。ハンスがカヲルに気づき、微笑んだ、そしてカヲルの席が溶けあった三人の心の内に用意され、そこに座った。

また馬車に乗り込み、街を目指す。村人たちは一人残らず教会へと向かう。それを見ながら、馬車は村を出る。

街に着くと、まず昼食を済ませ、その後、二人は様々な菓子を買った。ビリー一人ではその量はとても食べきれないだろう。だが、二人はある固い意志を持っているようで、ひたすら菓子を買ってこみ、カヲルはただ黙っていた。帰りの馬車で、カヲルは菓子を貰い、それを食べた。甘くておいしかった。ビリーが喜んで食べている姿が浮かび、さらに美味しくなる。

夜、村に帰ると、村は人々の熱気で溢れかえっていた。披露宴は佳境を迎えていた。酒に酔えるものはとことん酔い、歌えるものはとことん歌い、騒げるものはとことん騒いでいた。馬車を降りると、沢山の手が伸び、料理や酒が三人に渡された。三人はひとまず旅館に行き、荷物を置いた。

「カヲル？」とブロンデンが目を見開きながら言った。

カヲルは黙っていた。外の喧騒が聞こえた。明かりをつけていない部屋は暗く、隅の影から闇が溢れていた。

「カヲル」とハンスが追いつめるように言った。「何かを感じたよ。何か冷たいものが、君の体

から出てきて、それが僕らにも伝わった。カヲル。教えてくれないか、今のは何だ？」

「ビリーが……」とカヲルは呟いた。

「死んだのね？」とブロンデンが言った。その言葉は部屋にこだまし、三人を圧迫した。不動の巖が息をつまらせ、その存在感は一向に消える気配を見せなかった。

カヲルは広間に行って、人々の間を進みながら、暖かい飲み物を探した。親切な人が、そのありかを教えてくれて、そこに行くと、もうないから、どこそこに行けと言われ、カヲルは辛抱強く歩き続けた。やっとコップ一杯の熱いココアを手に入れて、両手で慎重に支えながら、旅館へと帰る。

カヲルは、全身の感覚を総動員させて、ココアをこぼさないように注意する。人々の影、建物と建物の間、明かりが届かない場所から、じっとカヲルを見つめている生物がいる。闇の生物たちだ。彼らに名前はない。カヲルはその視線をひしひしと感じた。怖かった。彼らが、いつどんな方法でカヲルを邪魔しようとするか、わからない。彼らは酔っ払いをけしかけて、カヲルにぶつけさせようとするかもしれないし、空から急に雨を降らせて、ココアを台無しにさせるかもしれない。カヲルの両手は塞がっている、もしそうなったら、どうしようもない。ココアの表面が揺れて、コップの縁に迫り、カヲルは立ち止った。カヲルの澄んだ水の心も、ココアに同調して、不規則に揺れる。カヲルは息を整え、緊張を解きほぐそうとする。

（こぼれたらどうしよう）とカヲルは恐れる。（どうやって守ればいいのか？ 私の両手は塞がっている。でも怖がっちゃ駄目なんだ。進まなきゃ。とにかく、冷めちゃう前に、進まなきゃ）

ブロンデンとハンスは、明かりもつけずに、部屋の中でじっとしていた。ハンスは、窓を開けて、人気のない裏路地を眺めた。菓子を取り出して、放り投げた。しばらく待つと、野良犬が現れ、菓子を見つけ、近寄っていった。周りを警戒している。ハンスはもう一つ投げた。犬はびっくりとするが、すぐに貪欲な表情を取戻し、涎を流しながら匂いを嗅いだ。ハンスは、靴を脱ぐと、それを力いっぱい犬に向けて投げつけた。一つ目は外れた。犬は飛びのき、ハンスに気付いて、怯えた表情をした。そして逃げ出した。ハンスは何か大きく叫んで、その尻に二足目を投げつけた。それは当たり、犬は悲鳴を上げた。

ハンスは菓子を齧り、ブロンデンに差し出した。「食べよ」と言った。ブロンデンは首を横に振った。ハンスは残りを握りつぶした。「くそ、くそ」と俯いて呟いた。

「ブロンデン、ハンス」と扉の向こうから呼ぶ声がする。二人は顔を上げた。カヲルだ。カヲルが二人を呼んでいる。

ブロンデンが立ち上がり、ドアを開けると、今にもこぼれそうなほどの量のココアをコップに入れて、大事そうに抱えているカヲルがいた。ブロンデンは笑った。縮んだ目から涙が零れ落ちた。カヲルからコップを受け取り、一口啜った。「温かいわ」とブロンデンは言った。

ハンスがコップを受け取り、大きく傾けて飲んだ。最後の残りを、カヲルが飲んだ。

カヲルの体が輝いた。部屋の隅々まで光で満たされ、闇の泉に栓がなされた。カヲルの背中

から、大きな羽が現れる。ブロンデンとハンスは、その羽を構成する羽毛一つ一つが、鮮明に見える。天使を象徴する、美しくかつ力強い羽だ。

カヲルの姿は消えた。部屋は暗くなり、ブロンデンとハンスだけが取り残された。二人は互いを見つめ合って、キスをした。長いキスだった。カヲルがビリーにしたように、優しく、愛情に溢れているキスだった。ブロンデンも、ハンスも、涙を流し、その涙は交わり、二人はそれを味わった。ハンスが閉めたはずの窓が、再び開け放たれていた。外では、新郎新婦が人々の中心に現れ、式の最後の締めくくりとして賞賛され、祝われていた。その声が部屋に香りのように漂ってきた。人々は二人のこれからの生活を祝い、幸せを願い、もはや二人が欠けた孤独な人間ではないことを確認し合い、新たに生まれる希望を夢見た。ブロンデンとハンスは、キスを止めると、抱き合った。二人もまた、もはや欠けた人間ではない。

終



シェルター

山中和明

彼はいつもムスツとしていた。不味いものを食べてその味がしつこく喉の奥に残っているような表情だ。だが彼が実際に不満を抱いていたかという、そうではない。恐ろしい怪物の姿をした感情、激しい心の作用による光線が、内側から彼の顔を眩しく照らしてただけであり、彼はその眩しさに目を細めていただけである。それが人に怒っているだとか、嫌がっているだとか、勝手に個人の常識によって解釈されているだけなのだ――僕もかつてはその一人だったのだが。そして彼は詩人だった。どこかの出版社のプリンタによって印字されて、大げさな表紙を付けられることはないものの、僕にとって確かにそれは立派で尊敬すべき詩だったのである。

僕は東京の会社に勤め、そこは本社なのだが、働き始めて五年後に、転勤の話が降りかかってきた。一応断っておくが左遷ではない。仕事は上手くこなしている。仲間内では一目置かれているぐらいだ。転勤先が実家のある県だったので、大学在学期間も含めて、約十年ぶりになる家族との生活が開始された。だが十年前の記憶のスライドと今の光景は重なり合わない、父は体の機敏さを失ってのろまになっていたし、母の持前の熱湯のような厳しさはゆるめられていた。中学生の時から飼っていた猫は、すっかり年老いてくすんだ毛を神経質に舐めていた。なにもそれは今になって突然現れた訳ではなく、徐々に浮き上がって来たものなので、僕としてもあらかじめちょっとした覚悟をすることができていたのである。だから、ほんの一時的なことであれ、彼が家の一部としてプラスされると聞いた時は、驚いて、彼の存在により変質する家の空気に、上手く馴染めるかどうか不安になったが、それは僕だけでなく、父も母も猫も同じことだったろう。

彼は、母の年の離れた妹の子供だった。小学六年生の春休み、紫色のクールな自転車と共に、我が家にやってきた。彼は街のマンションに両親と暮らしていたが、彼の父と母、互いの観念のズレは日に日に大きくなり、その家庭の病症の深刻化は誰にも止められなかった。二人は胸に膨らむ嫌悪の情を抑えきれず、妻の方は彼女の実家に帰り、夫のほうは自身の愛人であり、将来の新しい妻となるべき女のもとへと去っていった。そうして、静かなマンションの一室に、一人の少年だけが残った。みんな自分のことで一杯一杯であり、それに気付いていたのは、ただ少年だけであった。少年はこの家で暮らすことに、何の反発もしなかったので、物事は不気味なほど円滑に進んだ。離婚調停のドタバタによる影響を子供に与えないために、父の影に潜む母ではないもう一人の女の姿を認知させないために（彼はもうとっくに知っていたみたいだが）、そして子供の時代へと巻き戻ってしてしまった母親の代わりとして世話をしてもらうために、彼は家に預けられた。それはちょうど、僕が寮から家へ送った荷物をあらかた片付けた終えた時のことであったが、とたんに僕の過去が詰まった部屋は彼に明け渡され、というのも部屋には立派なベッドがあったからなのだが、僕はがらくたが巢食っている小さな暗い部屋の住人になった。彼が家に住むのは、春休みの間だけということになっている。彼の若い母親は、姉に彼の中学への進学に必要な一連の準備をも頼み込んでいた。

マンションで待つ彼を迎えに行ったのは僕だ。

ドアを開けて出てきた彼に当然笑顔はなかった。ひどく生真面目な表情をしているようにも見えるし、少し怒っているようにも見える。挨拶をすると、頭を下げて「よろしくお願いします」と言った。僕は慌てて、にやにや笑いながら、気にすることはない、といった意味の返事を長々と返した。彼が眉一つ動かさずに、冷静に僕の顔をじっと見つめていたのを覚えている。彼は大きなリュックサックを背負っていた。「忘れ物は無い？」と聞いた。彼は頷いた。「まあ、何か取りに来たかったら、車で送ってあげるから」。エレベーターに乗り、僕らは黙りこくって駐車場まで移動した。「あの」と彼が遠慮がちに言う。「なに？」と僕はすぐさま聞き返す。「お願いがあるんです」「いいよ。言ってごらん」「自転車を持って行ってもいいですか？」。

彼の自転車は小さな子供用のものだったので、僕がそれを担いで、車の荷台に乗せてやった。「自転車が好きなの？」と聞くと、こくりと頷く。車内で、それが会話の糸口になるのを期待したが、どうにも上手くいかない。緊張している訳でもなさそうだったから、僕は同僚に普段話しかけているように気さくに喋ったが、もしかしたらそれに戸惑っていたのかもしれない。だが、やはりもともと彼は内向的な人間だった。手を動かして外界のものをいじるより、雑多な心の部屋を整理したり探検したりするほうを好んだ。ラジオのあの独特な女性の話し方、濃い味がずっと消えていってしまうような声を聞きながら、こいつ何を考えているんだろう？ と横目で見ながら考えた。僕らが想像もつかない哲学的なことを考えているといっても違和感はないし、逆に、何も考えずぼうっとしているといっても、その図式は一ミリの隙間なく彼に当てはまる。

家に着くと、彼は母と父と猫に歓迎された。ここでも彼は礼儀正しく、母の方を向いて「おばさん」、父の方を向いて「おじさん」、僕のほうを向いて、口を開けて黙ったので、「お兄さんでいいよ」と冗談の味も含めて僕が言うと、彼は真面目に「お兄さん」と僕に言って、「少しの間、よろしくお願いします」と頭を下げた。お婆さん猫カルピスも（僕は当時カルピスが大好きだったのだ）、にゃあと鳴いて、彼を拒む気はなさそうだった。穏やかなムードの中で、母が買ってきていたケーキをみんなで食べた。

彼の朝は遅い。昼の十二時を過ぎていてもぐっすり眠っていてリビングへ降りてこないこともたびたびある。昼食を済ますと、彼の自慢の自転車に乗って、どこかへ出かける。例えば、友達と遊びに行ったのかもしれない、一人でゲーム・センターに籠っているのかもしれないと勝手に推理したりしていたが、どうも違うようであった。というのも、彼が自分の携帯電話を使っている姿はあまり見かけなかったし（彼の友人との連絡方法は唯一携帯電話だけなのだ）、僕らから隠れて部屋で友達と連絡を取っていたというのも考えがたい、彼は大抵の時間をリビングで過ごしていたし、部屋へ行くときもよく携帯電話をリビングに置きっぱなしにしていたから。あまり携帯電話をいじる姿も見ない。ゲーム・センターの件にしても、彼が自転車を降りてある一定の場所に何分かとどまるというのは、想像しづらかった。彼はほぼ毎日、自転車に乗って家を出た。帰ってくる時間はまちまちだった。母が注意していたから、夕方までには帰って来ていたが、十分くらいですぐ帰ってくることもあったし、日が落ちる寸前に帰ったこともあった。一週間後

、彼は二時ごろ家を出て、五時過ぎに帰ってきたが、自転車に乗ってはいず、それを手で押して帰ってきた。目を僕らと合わせようとせず、伏せがちにして、申し訳なさそうな表情をしている。自転車のタイヤをパンクさせたのである。その日は休日で、僕は家にいたので、車で自転車を専門店へと運んでやった。その三日後、今度はチェーンを外して帰ってきた。無理に直そうとしたので、彼の手は錆でべとべとに汚れている。僕はそれを夕食の席で聞いた。父が、「もう少し優しく運転しなくちゃいけないよ」と穏やかに諭したが、彼は黙って頷くだけで、わかっているのかわかっていないのか、誰にもわからなかった。彼の故障癖はその後も続き、結局、春休みが終わってマンションへ帰るまで、治らなかった。あんなにタイヤをパンクさせたり、チェーンを外したりするためには、長時間自転車に乗り続けていなくてはならない。乗車時間が長ければ長いほど、故障する確率は高くなるだろう。彼はどこか目的の場所へ移動するというより、移動そのものを目的として自転車に乗っているのではないだろうか？ と僕は思ったのだ。そしてその推理は正しかったのだと今では思う。彼の口からじかに聞いた訳ではないが、ちゃんとした裏付けがあるのだ。

深夜、僕は父と一緒に、ウィスキーのオンザロックを飲みながら、スポーツ・ニュースを見る。画面に張り付いたペラペラの選手たちが、走ったり、汗をかいたり、怒鳴ったりしている。キャスターが耳に媚びるような声を出して選手たちの功績を讃える。父の唇は始終緩んでいる。僕と酒を飲みかわしながらスポーツ・ニュースを見るのが嬉しいらしい。そんな父の姿を見ると、失った時代に対するセンチメンタルの渦に巻き込まれそうになるが、酒の力の六割ほどを取り込んで（残りはセンチメンタルに奪われた）、僕は自分を落とさないよう踏ん張っていた。

階段を降りる足音が聞こえる。二階の部屋から、彼がリビングへとやってきたのだ。「眠れないのかい？」と父が心配そうに聞く。彼は頷く。目はいつもよりも見開かれ、パジャマのポケットに震える手を突っ込んでいる。視線は一点に集中することなく、不安げに散在している。

「お茶、飲む？」と僕が聞く。彼は頷く。

僕ら三人は低いテーブルを囲んで、それぞれ飲み物を持ちながら、絨毯の上に座り、スポーツ・ニュースを見る。

「野球、好き？」と僕は聞いてみる。彼は首を横に振って否定する。「何か好きなスポーツとかある？」。彼はまた首を横に振る。「そうか」と僕は言い、ウィスキーを飲む。

沈黙が三人を包む。優しい沈黙だ。テレビの内側の住人だけが、僕らのことなんか関係なしに、まるで強いられているかのように必死に騒いで、笑っている。

父がときどき、テレビに対して感想を漏らす。「おっ」とか、「これはこれは」とか、「あらっ、これは……」などなど。その言葉はどこにもいかない。誰も答えない。

「今日は、どこまで行った？」と僕は聞く。

「ちょっと、遠くまで」と彼が答える。いつもそうだ。自分がどこを目的として、またはどこまで行ったのか、彼は話さない。

彼は頭を左右に動かして、何かを探しているようなそぶりを見せる。

「どうしたの？」

「カルピスは？」

「おや、どこかにいないかな」と僕もカルピスを探す。

「呼んでごらん」と父がテレビから目を離して言う。

「寝てないかな」と彼が言う。

「平気だよ。あいつは眠りが浅いんだ。歳を取ってからというもの、一日中うとうととしているからね」と父が笑って言う。

「カルピス」と彼が呼ぶ。

しばらく待つと、カルピスがキッチンの暗がりから現れて、テーブルの周囲をうろうろした。彼がそれを捕まえて、自分の組んだ足の上に寝かせた。カルピスは彼の望みのままである。何の反発もしようとはしない。

「中学校は、楽しみ？」と僕は聞いてみる。

彼は反応に困って、小さく笑みを浮かべて、首をかしげた。そして、「まだ、何があるのか、わかんないから」と呟いた。

「そりゃ、そうだけどさ」と僕も笑って言った。

「卒業式のときは、泣いている子もいたよ」

「よっぽど悲しかったんだね、卒業するのが」

「僕は泣かなかったけど。でも、不思議だったな。あの子はどうして泣いたんだろう。みんなそろって中学に行く訳だし、先生にだって、学校に行けば、すぐにまた会える訳だし……」

「それもそうだ。言われてみれば、不自然だね」

彼は頷いて、熱いお茶を啜った。

「でも卒業式ってのは、不思議に悲しい響きがあるよね。確かに、小学校の卒業式は、友人との別れもないし、家族と別れる訳でもない。もちろん、例外はあるだろうけどね。先生との別れだって、そんなに悲しいことではないだろう」

「馬鹿、卒業式のせつなさは、そんなもんじゃないだろう」と父が言った。「もちろん、人が涙を流すのは、そういうおまけがあるからだが、でもその涙の底には、悲しみの芯があるんだ」

「じゃその悲しみの芯って何だよ、親父」と僕は、父の突然の真剣さに可笑しみを感じながら聞いた。

「お前は鈍いからな、わからんかもしれんが、ほら」と父は彼のほうを見た、「君はわかっているんじゃないかね？」

彼はコップに目を落としていて、答えない。

「卒業ってのはな、脱皮みたいなものだ。殻を脱ぎ捨てて、柔らかい身を露わにしながら、大きくなるのだ。俺はな、親としてな、沢山の脱ぎ捨てられた殻を見てきたよ。その瞬間を見るとな、嬉しい半面、悲しいんだ——で、俺がこんなに悲しいんだから、脱ぐ本人はさぞ苦しいだろうと思っていると、これがびっくりすることに、本人はけろっとしていて、何も感じないみたいだ。気付いてないんだな、本人は、自分がたった今何をしたのかに。鈍いというか、何と言うか... ..まあ、本能っていう奴の仕業かもしれんがな」

父は喉にものが詰まってひいひい言うような笑い方をした。そして、いきなり真面目な顔をし

て「悲しいだろう？」と彼に話しかけた。

「君のお父さん、お母さんのことは、本当に難しいことだ……」と父が急に語り出したので、僕の心は凍りついた。アルコールの蒸気の雲が脳から取り払われて、全ての感覚器官が彼の動作の読み取りに集中した。父がやろうとしているのは不味いことだとわかっていたが、ここで話を止めさせるのは、おそらく、さらに不味いことだろう。

父は、君は強くならなくちゃいけない、この問題に向き合わなくちゃならない、大変だが、私たちは君の味方だ、君は頑張っただけから生きていくんだ、というようなことを話した。彼は顔を俯けたままで、何の反応もしなかった。頷きもしなかった。ときどき、カルピスをそっと撫でた。カルピスは顔を上げて、彼の顔をじっと見つめていた。彼はただ下を向いているんじゃない、カルピスの澄んだ青い目の底を覗き込んでいたのだ、僕は父の話が終わると同時にそれに気付いた。

彼が二階の部屋に戻ると同時に、僕もウィスキーを止め、彼の後を追って二階へと行った。部屋の前で、彼にそっと語りかけた。「父は酔っぱらっていただけなんだ。……」。言葉はそこで途切れ、考えていた言葉の繋がりは次々と絶たれ、文章は離散していく。僕は彼に許しを乞いたかったのだ。もっと他の言い訳を並べるべきだと思った。だが、僕は彼の心に引かれたピンと張った細い糸、そこに足を引っかけることを恐れ、何も言えなかった。彼は頷いて、多分、「大丈夫です」と言ったのだと思う。かすれて小さな声だった。そして部屋の中へと入っていった。

深夜、父と一緒に飲んでいる時は、彼はもう二度とリビングへは来なかった。眠れない夜は幾度もあったと思う。ただ、父がはず、僕一人で夜更かししている時、彼は下へ降りてきてくれた。彼はカルピスを呼んで、僕ら三人で、眠くなるまで、黙ったまま、コップを握りしめながら、夜を過ごした。

春休みが終わる頃、彼をマンションに送り返したのは僕だ。

車中で、彼は助手席に座り、柔らかい少年の顔の肉に、暴力の影が切り込まれている。彼の顔はまだ大理石ではない。痛みにも敏感な薄い、青白い子供の肌なのだ。固くなるにはまだまだ時間がかかる。彼は冷たい刃の切っ先が頬に触れるのを感じながら、それに必死に耐える表情をしている。それと同時に、目にはある決意のきらめきがあるようだ。僕はそのことに驚く。

「部屋まで、送ろうか？」と僕は聞く。

彼は首を横に振る。「いいえ。大丈夫です」。そして、僕に今までのお礼を言って、自転車を手で押しながら、歩いて行く。

家に帰ると、半ば興奮した父と母が、僕に一冊のノートを手渡す。「なんだよ」と聞くと、「これ、あの子が捨てていったものなの」と母が言う。「ゴミ箱に入っていたの」。母はノートをゴミ箱から取り出して、古紙回収のために他の古紙と一緒にまとめようとしたが、その時、何気なしに開いてみたという。「そういうの、よくないぜ」と母に文句を言いながらも、僕も気になって、ノートを開いてみる。そこには、沢山の言葉が並べてある。彼が知りうる限りの、言葉の全て。それを組み替え、変形し、調合して、作り出した新しい言葉の数々。僕はさっと目を通

して、待ちきれず、すぐ次のページをめくっていく。彼の詩を、僕は夢中になって読んでいく。「たまげたなあ」と父が顎を撫でながら、感心したように言う。「だんまりでも、こんなに色々なことを考えていたんだから」。

器に水を注ぐ。器が大きくて、水が漏れずに全部収まってくれと願う。だが水は漏れる。だからもっと大きな器を用意しなきゃならない。だがそんな器は、マーケットの棚にいくつも並べられているような代物ではない。他人が持ってくる常識の内にあるようなものでは駄目だ。自分で作らなきゃならない。迸る感情の血潮、それを受止められる器は、自分で作らなければならない。その詩はきっと、彼の生き延びる術だったのだ。

会社に車で向かう途中に、彼を見かけたことがある。

赤信号で止まっている時に、ふいに自転車に乗った彼が、車のすぐ横を通って、前へと進んでいった。ぶかぶかで、堅そうな、黒い制服を不器用に着込み、大きな銀色の自転車を、必死にバランスを取りながら、こいでいる。あの紫色をした小さな、だけれども彼の体にぴったり合っていた自転車はどうしたのだろうか？ もう捨ててしまったのか？ 今の彼は自分より一回り大きなものを身に着けて、それにありったけの力を込めて反発し、抑え込んで、馴らそうとしているかのように見える。

彼はゆらゆら揺れながら、ハンドルを左に切る。自転車は、彼の意に反して、まっすぐ進もうとするが、彼がさらにハンドルを切り、重心を左に寄せたので、仕方なく左に進む。信号が青になり、僕はアクセルを踏む。車は進み、彼と離れていく。

最後に、彼の詩を載せようと思うが、今さらながら、疑問に感じ、それを止めようとする思考の動きがある。やはりそれは捨てられたものだし、彼が不必要だと判断したものであり、ゴミ箱の中で一生を過ごすべきものなのかもしれないのだ。僕が持っている彼の詩はもはや彼の心の中心を占めない。どこか別の場所に押しこめられているはずだ。

一つ、印象深い詩があって、ときどきぼうっとした意識の時、脳みそを掘り下げていくと、その詩がぱっと出てくることがある。そういう時、僕は彼を思い出して、懐かしむ。自転車を壊して縮こまりながら帰ってきた姿、僕と彼とカルピス、三人で飲み物を飲みながらひたすら黙って過ごした夜、最後の日、マンションに着く間の、心のある一点を注視しているようだった目。問題は何も解決していない。解決する見込みもないし、彼が与えられた荷物の重さ、それは減ることはない。彼は自分を鍛える方法を探して、筋肉を付け、ひたすら耐え忍ばなければならなく、そうして、彼は一体どこへ行くのだろうか？

情けないことだが、僕は道に迷う彼を前にしながら、ついにそのことがわからなかったのだ...

...

\*

僕の祈り

透き通るような青い空、怠け者の雲、暖かい白い風、  
 そこに浮かぶのは、一個の爆弾  
 笑いあう人々、子供の名を呼ぶ母親、働く父親、  
 彼らがいるのは、廃墟となった丸いドームの下  
 僕はシェルターを探さなくちゃならない、  
 顔をドロドロにしちゃう恐怖の爆弾が落ちる前に  
 火の海から救われなくちゃならないのは、  
 僕一人 僕は神様じゃないのだ  
 (僕が神様だったら、もちろんみんなを救うけど)

シェルターは、小さくて、白くて、肌触りがいいのが良い  
 僕一人が入ればそれでいいのだ  
 でも贅沢をいえば尻が痛くならないように、  
 中にはクッションぐらいあるのが良い

爆弾よ止まれ！ ああ、また一センチ下降した……  
 僕の紫の相棒が、足を高速回転させながら、  
 急げ！ 急げ！ と僕を励ます  
 僕は紫の風となって疾走する！

蟻の巣をほじくったりもしてみるけれど、  
 そんなに簡単に見つかるものじゃありません  
 相棒が壊れて、ジュースを買って飲むけれど  
 こんなにみじめなことってなかなかないよ

一体どこに向かって？  
 なぜ僕は銃に言葉の玉を込めるのか  
 誰かに向かって撃つわけでもなく  
 退屈しのぎに空砲ばかり発射している  
 一体なんの意味があって？

いや違う、僕は弾を撃っている、  
 それを埋めこむべきは 天空にいる神の心  
 誰にも届かぬ僕の言葉、  
 だが、ああ、神よ！ あなただけがそれを知っている！

僕はさびしい

カルピス、カルピス、どこにいるんだい？……

僕の膝においでよ！ カルピス、隠れてないで、さあ！……

僕はさびしい、

さびしくて死にそうだ

終

〈後書き〉

今回は、戦闘シーンの記述と、詩の作成にチャレンジしてみました。

戦闘シーンは、まあまあかな？

詩の作成は、これっきりにしておきます。（とても恥ずかしい）



## デザインリング（後編）

秋月 夢人

メイドとして、もっとも忙しい時間帯は、午後一時から三時である。私は昼食の後片付けをすると、すぐさま掃除に取り掛からなくてはならない。この掃除が厄介な代物なのだ。

「掃除」自体が大変だ、という訳ではない。一つだけ掃除しにくい部屋があるだけだ。

その部屋は展示室と呼ばれ、あるものが安置されている。

叔父は「あるもの」のことを失敗作と呼んでいた。しかし、専門家に言わせると、世界に二つとない名品らしい。私にはどうしてもそう思えないのだが。今日も他の部屋を掃除した後で、その部屋に向かう。その部屋は館の一階の最奥にある。

そこは日当たりが悪く、昼間でも薄暗い。私としては、あまり入りたくないところである。しかも展示室の下にある地下室も掃除をしなくてはいけない。ふつうの部屋の二倍の時間がかかる。だからいやなのだ。そうは言っても、仕事は仕事。さっさと片付けてしまうことにしよう。私は胸ポケットから、部屋の鍵を取り出す。それを鍵穴に差そうとした時、後ろから音もなくいきなり私は誰かに肩を叩かれた。

ギクリとして振り返ると、そこには叔父が立っていた。朝と同じくひどく眠そうな顔をしている。

「今から掃除するのかい？」

「はい……どうかなさいましたか？」

叔父はボリボリと頭を掻きながら私の目を見つめた。一瞬表情に躊躇いの色が浮かんだ。いつもは泰然としている叔父としては珍しい。

「今日はこの部屋を掃除しないでくれ」

「えっ……掃除しなくてよろしいのですか？」

「ああ、今日ちょっとその部屋を使うことになってな」

「でしたら、却ってお掃除したほうがよろしいのでは？」

叔父がいつもと違う。私は胸の内にもやもやした物が広がっていくのを感じた。そもそも叔父は綺麗好きで、掃除に関してはかなり口うるさいのである。私の経験から言って、掃除の不備を指摘されることはあっても、褒められたことはなかった。

「まあ……なんだ、この部屋に入るのはおまえと俺だけだろうし、一日ぐらい掃除しなくても大丈夫だろう」

にわかに信じがたい言葉である。私は叔父の言葉に反論しようとして口を開きかけた。

「とりあえずこの部屋の掃除はナシだ。分かったね。それより今日の客をもてなす準備はできているのかい？ お茶請けがないとか言っていたと思うのだが」

「あっ……掃除が終わったら買いに行くつもりでした」

「そうか、じゃあ掃除を切り上げて、すぐに買い物に行ってくれ。客が予定よりも早くるかもし

れないから」

叔父はそう言うと、くるりと私に背を向けて、スタスタと食堂のほうへ歩いった。私は叔父の背中を見つめながら、心の中でのた打ち回る不安と戦っていた。いつもと勝手が違うのだ。

どうにも今朝から予想外の出来事が続いている。誠一君に哲学的問答を吹っかけられたり、叔父に謎めいた態度を取られたり。こんなことが連続すると、私の方の調子も狂ってしまう。

私はしばらく部屋の鍵を握りしめたまま、その場に立ち尽くしていた。

\*

件の客は、柱時計がちょうど午後五時を知らせた時にやってきた。初めて会う男性だった。

「いやあ、遅くなってすみません」

枯れ枝のごとく痩せている体、メガネの奥からのぞく気弱そうな目。彼が誠一君の担任だと聞いてびっくりした。正直言ってもものすごく頼りなさそう、という感じしかしない。これで教師をやっているのだろうか、と私は心の中でいらぬ心配をした。彼を叔父の書斎に通し、台所でお茶の準備をする。

「今日はどれにしようかな……」

「忙しそうだね、メイド長」

いつのまにか私の背後に誠一君が立っていた。右手に文庫本をぶらさげている。

「誠一君も飲みますか？」

「うん、銘柄はまかせるよ」

紅茶のいい匂いが食堂をだだよっていく。今日はスタンダードにダージリンのストレートを選んだ。文庫本を読んでいる誠一君の前にカップを置く。

「サンキューメイド長」

「どういたしまして。なに読んでたの？」

角砂糖を入れながら、私に向かって文庫本が差し出される。手に取ってみろ、ということか。ブックカバーがかけられた表紙をめくる。

「……ルネ・デカルト『方法序説』って……」

「親父の書斎から失敬してきた。哲学書を一回本気で読みたくなっただ」

「……良識はこの世でもっとも公平に配分されているものである。という書き出しよね、確か」

私がそう言うと、誠一君はヒュッと口笛をふいた。

「メイド長はもの知りだね。読んだことあるの？」

「昔一度だけ。ものすごく難しい本だったわ。もう冒頭の一文しか憶えてない」

私は二人分のティーセットを用意して、紅茶を注ぐ。その間も香ばしい匂いと共に話は続く。

「良識が公平に配分されるなんて嘘だと思うな」

「どういうこと？」

誠一君は天井を見上げてクスクス笑う。こんな時はいつも答えをはぐらかされてしまう。私

はちよっぴり肩をすくめて、カップをお盆の上に置いた。

「ねえメイド長、鈴木先生の様子はどうだった？」

「鈴木先生？ 今叔父と話している人かしら」

「そうそう、歩くと風に飛ばされそうなオッサン」

私はガリガリに痩せた客人の姿を思い出す。なるほどしっくりくる表現だ。先生には失礼かもしれないけど。

「誠一君は鈴木先生が――」

「嫌いじゃないけどね。すげー頼りないからさ、なめられるんだよ、あの先生は」

「……そうなんだ」

やっぱり教師に対していい感情を持っていないらしい。しかめた顔がそれをよく物語っている。私はドアを開けてお盆を持つ。冷めないうちに運んでしまおう。

「……良識か」

部屋をでるときの誠一君のつぶやきが、耳に残った。

\*

拝啓 イチヨウが鮮やかにいろづいて、すっかり秋になりましたね。十六夜館ではもう冬支度が始まりました。私を含めて館の住人は冬が嫌いです。特に叔父に言わせると、どんより曇った空は創作意欲を吸い取ってしまうそうです。私もなんとなく分かる気がします。天気で気分が変わることってありますから。 碧さんはそんなことないでしょうね。きっと笑ってすませてしまうと思います。この前手紙に書いたことも笑って受け流せばいいんですが、うまくいきません。今日も週刊誌の記者からしつこく電話がきました。マスコミ関係者のずけすけとした話し方は、本当に腹が立ちます。下品ってこういうことだと思います。碧さんは事件のことを気にしていましたよね。事件のほうで変わったことあまりありません。時々やって来る刑事にそれとなくさぐりを入れているんですが……私にも刑事さん達があせっているのが分かります。もう三か月になりますから。時間が過ぎるのは早いものです。今日誠一君の担任の先生が来ました。お茶を持っていったとき、叔父が怒鳴っていたのにびっくりしました。叔父が怒鳴るなんて、いったい何年ぶりかしら。誠一君が不登校になってからもう一年になります。やっぱり学校でなにかあったのでしょうか。心配です。前回碧さんはもっと私のことに触れてほしいとおっしゃってましたが、結局館の愚痴になってしまいました。次回はきっちり書きたいと思います。季節の変わり目は体調を崩しやすいそうなので、碧さんも気を付けてください。また手紙が来るのを待ってます。ではお互いよいことがありますように。 敬具

完成した手紙を見て私は大きく息をついた。手紙を書くことで少し肩の荷が降りたと思う。電気スタンドのそばに茶色い封筒がある。私宛のものだ。その中から四つ折りにされた便箋を取り出す。いつものようにきれいな筆跡が並んでいる。碧さんの几帳面な性格が表れていた。彼女の書く文字はいつも私を安心させる。記憶の淵にある彼女の姿もそうだった。同じ中学生なのにと

ても大人っぽくてとても頼もしいひと。彼女がいつも読んでいた詩集のせいだろうか。手紙もどこか詩的なものを感じさせる。私は彼女の手紙をゆっくり読み始めた。

拝啓 ようやく暑さが緩んで、秋らしくなりました。桜栴天神では秋の例大祭の準備が始まりました。蔵から神事に使う道具を出したり、新しいお守りやおみくじを作ったりしてます。今度で例大祭は二百回目を迎えるので、氏子さん達もはりきっていますね。私もそれに応えるべく、神楽の練習をがっつりやっています。うちの神社の神楽のことは、前に書きましたよね？

歩き方から祝詞まで厳しく手順が決まっているんです。妹なんかは巫女装束を着るだけで疲れると言うくらいで、他人から見るとずいぶんきつく感じるみたい。確かに準備や練習は大変ですよ。でも私は神楽が好きなんです。シャンシャンと鈴が鳴るところに自分のステップと言葉を重ねる。それがたまたま楽しくのです。まるでギターとドラムが息の合ったセッションをしているよう。紡がれる祝詞は立派なボーカルです。神楽もれっきとした歌なのだと、私は思います。兄にこの考えを話したらおまえの趣味だろ、とつっこまれました。まあ昔バンドをやっていたときの名残といってしまうえばそれまでですね。それでも神楽は歌だと思うんですよ。実際にやってみればきっと分かると思います。だから葵さんもやってみませんか、なんてね。冗談はさておき、こんど神社に遊びにきませんか？ 例大祭もあるしちょうどいいかなと。たぶん葵さんは事件のことで悩んでいるでしょう。その気分転換もかねてお祭りを楽しむのもありだと思います。マスコミや警察がいろいろ言うてくるでしょうが、気にしないでください。証拠なんて一つも見つかっていないんですから。きっと事件はあるべき形で収束します。私になにかできることがあれば、遠慮せずに連絡をください。ささいなことでもいいので。そろそろ紙幅が尽きますね。叔父さんによろしくとお伝えください。では次の手紙を楽しみにしています。

敬具

P.S もっと葵さん自身のことを書いてくれるとうれしいな。

そう言えば、彼女と最初に出会ったのもお祭りだった。毎年隣町で開催される夏祭りに行った時のこと。当時私は中学一年生だった。夏祭りの最後におこなわれる花火大会。私は人垣にもみくちやにされながら花火を見ていた。身長が低いせいで、ずっと背伸びをしていたことを憶えている。また気温と人の体温でもものすごく暑かったことも憶えている。そのせいか私は気分が悪くなってしまい倒れそうになった。もう限界だと思ってしゃがみこんだとき、声をかけてくれた人がいた。

——大丈夫？

空色の浴衣を着た女の子だった。彼女はやさしく私の手を握った。

——熱中症かな、あなた歩ける？

そう言って肩を貸してくれた女の子が碧さんだった。とりあえず私はベンチに座らされた。

——ちょっと待っててね。

彼女はそう言うと、露店が集まっているところへ走って行った。なにをやるのだろうと思ってしていると、すぐに戻ってきた。両手にはタオルとペットボトルがあった。

――まずは体を冷やさないかね。

私を寝かせて頭の上にタオルをのせた。タオルは濡れていて、気持ちよかった。彼女の介抱によってじょじょに気分はよくなって、しゃべれるようになった。そこで私は彼女が同じ中学校に通っていることを知った。

――すごい奇遇だね。

言葉の意味は分からなかったけど、彼女のうれしそうな顔でなんとなく見当がつく。その後自己紹介もどきをして、しばらくおしゃべりをした。彼女とは初対面にも関わらず、ウマが合った。好きな音楽や小説の話でひとしきり盛り上がった。気分もよくなったおかげでかもしれない。結局彼女には駅まで付き添ってもらうことになる。別れ際のセリフがいまだに忘れられない。

――また学校で。

まるで親友のような口ぶりに私はとまどった。会ってからまだ二時間くらいしか経っていないのに。当然なれなれしいと思った。けれどもそれは一瞬で消えてしまう。不思議なことに私は手をふっていた。翌日学校に行くと私は彼女の姿を探した。どうにかして友達になりたい。そんな感情に動かされるまま、校内をウロウロした。そのかいあってか、昼休みに図書室で見つけることができた。そんなこんなで私は彼女と友達になった。文通が始まったのは中学校を卒業するときだ。

――ねえ、文通しない？

ちょうど携帯電話が普及し始めた頃だった。すでに手紙を書く機会は減っていた。私は彼女のアイデアにあきれる一方、納得してもいた。文学少女である彼女らしい。きっと文通するシーンが出てくる小説でも読んだんだろう。そう軽く考えて始めたのだ。それが七年以上も続くなんて、きっと彼女も思わなかったに違いない。

部屋にピピピと電子音が鳴り響く。時計のアラーム音だ。デジタル表示の数字が午後十一時をさしている。手紙を読んで物思いにふけていたらしい。我ながらいぶん懐かしいことを思い出したものだ。居眠り防止用のアラームをセットしておいてよかった。寝る前に一つ仕事を済まさなくては。

「戸締りしなくちゃ……」

廊下に出て順番に確認していく。電気の消し忘れもないか同時にチェックする。叔父の書斎、食堂、客間。どこもしっかり鍵がかかっていた。最後は展示室だ。真っ暗な廊下を歩くのはあまり気分がいいものじゃない。そもそも暗いところは苦手なのだ。展示室とそのまわりには窓がない。そのため闇がいつそう深くなっている。さっさと終わらせたい、そう思ってドアノブを回して手前に引く。鍵のかかっている感触が――

「あれ？」

ドアはスムーズに開いてしまった。本来なら開くはずのないものなのに。叔父が鍵をかけ忘れたのだろうか。細かいことを気にする彼らしくない。まず部屋のなかを確かめないと。もし空き巣なんかが入っていたら、大変なことになる。今夜館には私と誠一君しかいないのだ。叔父は突然「知人に会いに行く」と言って外出してしまった。不安は限りなく増大していく。私は闇に染まった空間へ足を踏み入れた。とりあえず電気をつけなくては。そう思った瞬間、なにかを踏

んだ。そしてもの見事に体のバランスが崩れた。私は頭の後ろから倒れていく。手をつくヒマもなく頭に衝撃が伝わった。そして私の意識は部屋と同じく暗闇に溶けていった。

\*

人の話声が聞こえる。けれども、それがどういう意味なのか理解できない。ちょうど人ごみの中にいるような、曖昧なものだ。

「.....だから.....言ったでしょ.....」

「仕方.....あんなに.....すべる」

「とにかく.....めいわく.....潮時」

私はゆっくりと目を開けた。視界には古びた白熱電球があった。ここはどこだろう。少なくとも館のなかじゃない。かろうじて自分が横になっていることは分かる。まずは起き上がらないどうしようもない。頭をあげると途端に痛みが襲ってきた。思わずうめき声が出る。それを合図に左右から人間の顔が四つ現れた。そのうちの一つはよく知っているものだった。

「おはようーメイド長。頭痛そうだね」

「ええかなりきてるわ。それより誠一君、これはどういう状況なのかしら」

四人のうちの一は誠一君だった。私は彼に支えてもらい起き上がる。ようやく部屋全体を見渡すことができた。部屋の中央には丸められたカーペット、すぐ横に針が止まった柱時計が。時計の後ろには壊れたテーブルなどのガラクタ類が積まれている。私自身は床に寝ていたらしい。もしかしてここは.....。

「ここはひょっとして、地下室？」

「そう。メイド長が嫌ってる部屋」

誠一君はいつもと変わらず淡々としゃべっている。食堂で雑談しているような、そんな感じだ。私は頭をさすりながら両側にいる見知らぬ顔を見た。

「いろいろ質問したいけど、まず私の両脇にいる子供は誰？」

私をのぞきこんでいたのは小学校高学年の男の子だった。全員下を向いて黙り込んでいる。ひょっとするとさっきの声は彼らだったのか。しばしの沈黙があって、誠一君が語り始めた。

「.....メイド長に嘘ついてもすぐ見破られてちゃうし、ストレートに言おうか。こいつらは例の失踪事件の被害者」

「はい？」

「もう一度言うかい？ 例の事件の被害者さ」

私はとっさに言っていることが理解できなかった。

「.....嘘でしょ」

「こればかりは本当なんだって。そうだろジロー」

誠一君の隣に座った少年がこくりとうなずく。分厚いメガネをかけた男の子だった。

「だって生きてる.....」

「メイド長、こいつらはあくまで失踪ただけでしょ。死体もないんだから勝手に殺しちゃだめ

だよ」

「でもどうして……」

そう言ったとき、大声が会話に割り込んできた。

「すいませんでした！」

びっくりして声の主を見る。あのメガネをかけた少年だった。

「誠一さんは悪くないっす。家出した俺達が全部――」

「ちょっと待って！ あなた達」

こんどは私が大声を出す番だった。そんな家出なんて。

「ホントにただの家出なの？」

「そうっす。俺達どうしても親の考えに納得できなくて」

私はゆっくりと力が抜けていくのが分かった。さんざん騒いだあの事件がただの家出なんて。

「どうして家出なんか――」

「おっと、それを聞くのは野暮ってもんだよ」

誠一君がニヤニヤしながら話しかけてきた。どこかこの状況を楽しんでいる感じだ。私はそんな誠一君の顔をにらみつけた。

「まあ大事に至らなくてよかった……あのメイド長、目が怖いんですけど」

「私が怒らないと思います？」

「マジで誠一さんは悪くないんですって。それにもうおしまいにしてようって決めたんです」

メガネの少年が身を乗り出してきた。かなり思いつめた表情をしている。私はすこし気圧された。

「おわりってことは、家に帰るの？」

「そうっす。これ以上迷惑かけられませんから。誠一さんには世話になりっぱなしで」

少年の言葉に誠一君はひらひらと手を振って応えた。

「たいしたことしてないよ。人を紹介しただけ」

「どういうことよ。ひょっとしてまだこの事件に一枚噛んでる人でもいるの？」

「さあどうだかね」

相変わらずにやけた表情を崩さない。この顔はだいたい人をからかうときに出るものだ。ものため息しか私は出ない。

「俺達絶対この館のことは言わないんで、大丈夫っすよ」

メガネ少年が自信ありげに口をはさむ。私はむしろその発言に不安を覚えるのだが。

「でも後始末が……」

そう言ったときパシャリという音がした。誠一君がいつのまにか手に携帯電話を持っている。

「……なにを撮っているのかしら？」

「いやぁメイド長の悩む顔は新鮮だなと」

私は大きく深呼吸した。やれやれ、ちょっとお仕置きしないとイケない。不自然にならないよう注意しながら、微笑みを浮かべる。気付かれてはいけない。

「誠一君ちょっと立ってくれませんか？」

「うん？ どうしたの」

誠一君が立つと、私は右手に力を込めた。

「私さっき怒ってるって言いましたよね。けれど許します。あることさせてもらえれば」

「えっ、なにをするの？」

もう一度深呼吸。

「往復ビンタです」

\*

拝啓 時間が経つのは早いもので、もう十二月になるんですね。碧さんはきっとこれから忙しくなるんだろうと思います。ようやく例の事件に決着がついてホッとしています。正直言って子供達に訴えられるかもしれないと、叔父も私も心配していました。最初そういう動きもあつたらしいのですが、立ち消えになったらしいです。マスコミも来なくなって、ようやく普通の十六夜館に戻りました。そうそう、誠一君が今月から学校に行くようになりました。ほんとうによかったと思います。なんでも担任の先生に諭されたとか。あれほど先生を嫌っていたのに、どういう心境の変化なんでしょうね。分かりません。分からないと言え、誠一君の協力者は誰だったんでしょう。碧さんに尋ねてもしょうがないことですが、どうしても気になるのです。今回はずいぶん短い手紙になりました。書きたいことはたくさんあるのですが……。うまくまとまりませんでした。次はしっかり書きたいですね。では風邪をひかないように気を付けて。

敬具

拝啓 師走の寒さが続いている今日この頃、どう過ごしていますか？ 今回の手紙ではちょっとした種明かしをしたいと思います。前回の手紙で葵さんは、誠一君の協力者は誰なのか気になってましたよね？ ズバリ言うと、協力者は浅野総一郎さんですよ。どうして私がそれを知っているかという、浅野さん自身から聞いたんです。葵さんが子供達に会った当日、彼は出かけていました。どこにいったか分かりますか？ 実は桜栴天神にいらっしゃったんです。私は巫女の仕事の一環としてお悩み相談みたいなことをしてます。浅野さんはそれを目的として、私に会いに来たんです。そこで家出の子供達を匿っていることを告白なされたんです。とても苦しそうでした。やっぱり罪の意識があつたのでしょうか。でも解決してなによりです。今回は忙しくてもう筆を置きます。次の手紙を楽しみにしてます。ではまた。

敬具

〈終〉

あとがき

三人の少年は最初全員死ぬ予定でした。どうしてこうなった。

そして編集長ごめんなさい。

執筆中お世話になった楽曲（敬称略）



岸田教団&明星ロケッツ アルバム『ロックンロールラボラトリー』

TaNaBaTa アルバム『Star Ocean e.p.』

FELT アルバム『Ground Snow』

TUMENECO アルバム『Re.TMNC』

凋叶棕 アルバム『辿』

Aftergrow アルバム『URBANIZEDSTEREO』

発熱巫女〜ず アルバム『Aria of Innocence』

サリー アルバム『ピグマリオン』

じゃねっと亭 アルバム『キミノネエンドロール』

舞風 アルバム『MuSou2』

Unlucky Morpheus アルバム『parallelism $\beta$ 』

幽閉サテライト 『濡れた髪に触れられた時』

SOUND HOLIC feat 709sec. アルバム『Moon Crusher』

回路-kairo- アルバム『8 magics to kill the gods』

ぴずやの独房 アルバム『Nouvelle Maliee』

Sound CYCLONE アルバム『reflection-soundcyclone's best-』

雨降り

晶城 氷夢華

友人に呼ばれた帰りのことです。夜も更けていたので、提灯を、と友人に差し出されましたが、月が道を照らしているからと、懐手して玄関を出ました。すれ違う風は身を縮めるほど冷たいはずなのに、酒でほてった体には心地よく感じるのです。ふと空を見上げれば、流れる細雲に隠されてはまた現れて、月がほの白くぼうっと浮かんでいます。畔道にはうっすらと、帰路につく私の影が伸びていました。

家まであとすこしと言ったところ、お堂の横を通って、杉の木立を抜けると、額にぽっ、ぽっと粒がかかりました。それもいつの間にか、さあさあと降ってしまう始末。雨宿りできる場所を探しますが、闇があるだけです。先程までは月が浮かんでいたのに、今は暗い雲ばかりで、照らされる道はありませんでした。浮かれた心は細くなる一方で、聞こえるのはしとしとと、空の泣き声。

――ほおら、降ってきてしまったじゃあないか。白い裾が土で染まってしまうよ――

そう、あの時も雨の降る夜でした。二十歳になる娘の、白無垢の、裾ばかり気にしていたが、隣にいた留袖の妻はそう言った私を見ていました。

――下駄は履いたか？ おうい、鞍を拭いてくれ。傘は？ 傘持ちはいないのか？――

気まり悪くて、いるはずの無い傘持ちを探しに部屋を出ました。勢いは無いけれど大きな雨粒がぱしゃん、ぱしゃん、と水たまりに跳ねます。

――父さまや母さまを濡らすわけには参りません。一人で行けます。おつきはこの、馬で十分です。雨もほら、止み始めました。大粒だったのも、今は小さく――

それを最後に、馬に乗って、小雨の中に消えて行ったのです。濡れては向こうに面目ない、引き留めようと妻が手を伸ばそうとしたら、白無垢の娘はおぼろに揺れて、闇に見えなくなりました。

しゃらしゃらと降る雨は、馬の手綱につけた鈴の鳴る音のよう。雲は、花嫁を乗せた馬でしょうか。朱色の組み紐飾りをつけた立派なものに違いありません。隠れて見えないが、化粧した白い顔を曇らせながら、馬に乗ってどこへゆくのでしょうか。

ついぞ空を見上げると、雨は降り止み、まん丸の月が光輪を背負って、雲間から覗いていました。

雨にぬれてひとりで行くとは。だれか、唐傘をさすお付きのものはいないのでしょうか？ 月暈とはよく言うもの。月は晴れているときに暈をさすのだから不思議です。どうして雨降りに暈をささないのでしょうか。唐傘が無い時は、娘のように馬に揺られていくのでしょうか。飾りもつけぬ、一頭の田舎馬にゆられて嫁いだ、その心はどれほど心細かったであろうと、今になって感じるのです。

あの時も、今も、この雨は雲ではない、月が降らせているように感じるのです。月もまた、泣

くようです。

あとがき

結構前に書いたものです。リメイクしました。（リメイクでこれか）言い訳すると、初めての題材なのでたどたどしさ半端無いです。すあまが食べたくなりました。

なんとか皆勤できればいいなって思います。

——童謡 「雨降りお月」——

結婚前夜

祐輝

お父さんと喧嘩した。些細なことだったのにお互い譲らなかった。いつもなら引き下がれることが、どうして今日は意地になってしまったんだろう。

「そういうときもあるわよ。家族なんだから」

お母さんはあっさりそう言った。お父さんはどこかに出かけてしまって、今はお母さんと二人きりだ。

「でも、こんな日に喧嘩したくなかった」

「あんまり気にしないでいいと思うけど。お父さんだって帰ってきたらケロッとしてるわよ」

そうかなあ。そうよ。

お母さんの言葉を聞いて、それもそうかと納得した。ならば私もお父さんが帰ってくるまでに気持ちを切り替えなきゃ。

「なんなら、一緒に夕飯でも作る？ お父さん喜ぶんじゃないかしら」

「うん、じゃあ手伝おうかな」

お父さんに対しての罪滅ぼしでもあったけど、お母さんへの感謝の気持ちもあって手伝うことにした。私は明日から、この家の人間ではなくなる。もちろん近くに嫁ぐのですぐに帰ってくることはできるのだろうが、向こうの家に入る以上、もういつでも来られるわけではないのだ。

「切干大根を戻してちょうだい。それからなめこを洗っておいて。今日はなめこ汁よ」

やった、なめこ汁。私は味噌汁の中でもなめこ汁が一番好きだった。お母さんは覚えてくれていたのだろうか。

私はボウルに切干大根を入れた。少し洗って水に浸しておく。次になめこを袋からザルにあげ、よく洗った。なめこは鍋に入れて、水を張った。そこにお母さんが切った長ネギを入れて火をつけた。お母さんは長ネギの次に人参を切っていた。もう一つのメニューは切干大根の煮物のようだ。

「切干大根で、他に何入れたっけ」

「そうね、あとはひじきと油揚げだから、先に人参と大根を炒めておいて」

切干大根の水気を切って、油をひいた鍋に入れる。横から人参が入れられ、炒め始めた。矢継ぎ早にひじきと油揚げも入れられた。

「あら、切干大根の戻し汁捨てちゃったの？」

「え、ごめん。何かに使うの？」

「煮物に入れるとおいしいのに。覚えておきなさい」

そうだったのか。もったいなかったな。

私はそれらを炒めつつ、水と出汁を入れてよくかき混ぜた。酒と砂糖、しょうゆにみりん。順番

などは気にせず一気に入れた。調味料が入った途端に懐かしい香りが広がる。お母さんは冷蔵庫から塩鮭を取り出してグリルに乗せていた。今日のメインは焼き魚のようだ。鮭の切り身はすぐにパチパチと音を立て始めた。続けざまにお母さんはなめこの方の火を止めて味噌をとき入れていた。換気扇が古いので、コンロの周辺は湯気が立ち込める。

「もう味噌汁作っちゃうの？ まだお父さん帰ってきてないから、冷めちゃうよ」

そう、味噌は沸騰させるとおいしくなくなる。泡が出て見た目も悪い。だから私は味噌汁を温め直すのが好きではなかった。きちんと見ていればいいのだけど、こういうガサツなところは結局直らなかった。

「もうすぐ帰ってくるわよ」

お母さんはやけに自信満々だった。けれど、こういったことでお母さんの勤が外れることはなかった。

煮物が煮詰まってきたところでお父さんが帰ってきた。本当にお母さんの予言の通りだったが、私は特に驚かなかった。

私も、こんな夫婦になりたいと思った。

「冷蔵庫に浅漬けがあったでしょう。出しておいて」

言われるままにタッパを取り出した。白菜、人参、大根に柚子の皮が入って、塩と少しの酢で薄く味がつけられていた。我が家では浅漬けはサラダ感覚で食べられている。白菜と大根の浅漬けは、冬に野菜を摂る時の定番だった。つまみ食いしたら、いつもどおりのちょうど良い塩気と酸味で、柚子の香りが冬を感じさせた。

「ただいま」

お父さんはテーブルに着いてもう一度言った。

「おかえり」

私とお母さんは声を揃えて言った。

ご飯をよそい、おかずを並べる。こうして見ると非常に質素だった。でも、明日は結婚式だ。お父さんやお母さんの世代には少々脂っこ過ぎる料理が多く出るだろう。明日はそれに付き合わせるのだから、今日は私が付き合わなければ。

「いただきます」

手を合わせて、家族揃って食べ始める。お父さんは無口な人だが、どうやらお母さんの言っていた通り機嫌は悪くないようだ。お父さんはさっきのことについて謝らない。私も、謝らない。話題にすら上がらない、それでもシコリがなくなったことは分かった。

「そういうときもあるわよ。家族なんだから」

お母さんのさっきの言葉が身に染みた。何気ない言葉だ。実際、さっきは私もそのまま流していた。

私はお嫁に行く。明日にはこの家は私の帰るべき場所ではなくなる。けれど、家族だからいつも通りだし、家族だから意地を張ることもある。戸籍や住所、書類的には私はこの家の人間ではな

くなる。でも、家族だよって。そんな意味も込められていたのではないか。

私ももしかしたら、それを実感するために喧嘩してしまったのかもしれない。そんな風に考えながら浅漬けを食べたら、さっきよりしょっぱい気がした。

おわり

本日のメニュー

人参と切干大根の煮物

白菜と大根の浅漬けゆず風味

なめこ汁

鮭の塩焼き

エピローグ

雨宮御波

世界が傾いていた。

7時2分、明かりとりから光が漏れている。あまりの眩しさに起きてしまった。本日も快晴で小鳥たちはおしゃべりの真っ最中である。彼らの囁きは、私にとっての目覚まし要因であるけども、鷹の一匹でも出てこないかと思う日もある。時にはベランダでの大合唱だってする。

目を開けるといつもの景色がおかしく見えた。例えるなら、トリックアートに魅せられた心地。いつの間にか美術館にでも来てしまったのか、いやそんなはずはない。見知った部屋だというのに始めてみるような錯覚だ。物があるべき傾きがない、すべて斜めに設置されている。何故なのだろう。

頭が働き出すと理由が分かった。何もおかしいことはなかったのだ。独りだというのに笑いが漏れる。ただ、私の体勢が可笑しかったのだ。頭が半分、ベッドから落ちていた。具体的に言うと12という角度で。それだけのことで世界は違って見える。私は一人ごちて、顔を洗うとか朝の諸々をするのであった。

冷水が本格的に私の身体を起こす。毎朝の習慣だとしても、冷たい水を顔に浸すのは慣れない。言っておくけど、私は金ヅチで水に顔が浸けられないとかそういうことではない。他の運動よりも水泳は寧ろ得意な方だ。しかも、バタフライ。話がずれてしまった。私は冷たい水が苦手なのだ。

しかし、温かい水で洗えばいいじゃないか、なんて無粋なことは言ってはだめだ。朝はやっぱ冷水に決まっている。結局、習慣を変えられない以上、私が変わらないといけならしい。

髪を結ぶと、さて朝食だ。適当な食器でシリアルを食べる。シリアルと言っても野菜が入っているちょっとお高めなあれである。トマトの酸味が美味しい。数種類の野菜が一気に摂れるため重宝している。本当は朝からティータイムと洒落こんでもよいのだが、水分は牛乳で補給できる。でも、美味しいフレーバーティーがあることだし一杯ぐらい飲んでも罰は当たらないはず。その前に、ごちそうさま。

部屋をジャスミンの香りが満たす。結局、食後には中国茶ということで、ジャスミンティーになってしまった。こういうときに私は優柔不断不断である。本命のフレーバーティーは午後に飲むとしよう。一人で飲むより二人で飲む方がおいしいはずなのだ。温かいお茶は心も体もリラックスさせてくれる。なんだか、二度寝してもいい気分だ。

誘惑を振り切って、適当に服を見繕うと袖を通す。別に今日は用事があるわけではない。だから、服選びには頓着しなかった。ふわっとしたというより、ぱりっとした出で立ちである。

一度友人に言われたことがある。君はベルガモットとかグレープフルーツとかシトラスのイメージだね、と。友人の言を鵜呑みにしたようで癢だけれど、私はシトラスの匂いを纏っていく。香水のミストを腹部に。ちょっとだけくすぐったい。シャワーとはいかないけど、私にとっては

朝のシャワーと同じ意味を持っていた。

彼女は気付いているのだろうか。私はもう一つ香りを重ねている。自分でも似つかわしくないと思えるローズとフリーズア。私の内側を彩る香りだ。ちょっとした反抗心の現れでもある。私の全てを見抜けると思ったら大間違いだ。我ながら子供じみた、あまのじゃくだと思いつつも、なんだかんだ良い香りに満足している。

こうして私、北条白虹の一日は始まっていく。

6月の下旬、そろそろ夏になろうかという時期である。陽はじりじりと強さを増しているようだった。目的地へと向かう、長い坂道。私以外に人はなく、それでも車道には車と循環のバスが行ったり来たりしている。単に歩道には誰もいないという話だ。私の住んでいる場所が、街の中であって駅も近く近隣とのアクセスが良い。それなのに目的地は郊外であって、足のない人にとってはひどく億劫な気持ちにさせる立地だ。車の代替機関としてバスがあるのだけど、何故私がわざわざ歩いているのかと問われれば、この長い坂が気に入っているからと答えるだろう。気に入っている理由は、ひどく自嘲的な考えからだ。坂を登り切った先に目的地、というのはどっかの誰かを、私の中に思い出させる。背負っているものに違いはあれど彼に自分を重ねているのだろう。……なんて、私はこういった感傷的な話しだって少しはできるのだ。あんまり甘く見ては駄目なのだよ？ さっきの言は胸の奥にしまっておくとして、歩道に沿うように紫陽花が植えられていることに注目してほしい。もう時期は過ぎてしまったけれど、私は紫陽花を見たかったのだ。梅雨真っ盛りの時には、紫色に限らず水色とか赤とか、きれいな花を咲かせていた。毎年のものであるのだけど、彼（彼女？）がすっかり姿を消すまでは、この道を通っていたかった。それに、何度かブーケみたいに花を頂戴したことだってある。もちろん、こっそりと。

後ろを振り返ると街の全景が広がっている。街の真ん中から、橋を渡ってこちら側へ、そしてそのまま真っ直ぐに行けば坂へとたどりつく、誰も迷うことはないだろう。橋の下には川が通っていて少し前までは大雨になると危険水域まで達したり達さなかったりして、住民をやきもきさせた。これからは水位が減ってやきもきさせることだろう。河原には早くも緑が茂っていて、本当に自然って強いのだなあとは私は感心する。私にもそれくらいの強さみたいなものがあったとしても、罰が当たらないはずだ。あ、もしかして強さは持っている物じゃなくて、手に入れる物なのかな？ そうだとしたらきっと私の強さなるものは、一生手に入らない。私が手に入れる努力をするとは自分自身、とうてい思えない。私は勇気とかそういう強いものとは真逆に属しているんだとちょっと思いつめてみたり。

閑話休題。橋を渡れば昔ながらの、大きい家もあれば小さい家が見受けられる。発展する街の中心とは対照的に、橋のこっち側は古めかしいように感じる。そろそろ人もいないのか空き家も目立ってきている。この距離なら、何をするにしても街に出た方が何でも揃っているし便利だ。すたれるのだから無理はない。

おおざっぱな概観の説明はこんな感じ。坂道もそろそろ頂上を迎えそうだ。

頂上には大きな白い建物がある。何棟にも分けられた要塞みたいなところ。私は常々思っている



のだが、要塞って外部からの脅威に備えると同時に、監獄みたいに中から何者かが出ないために要塞化することってあるよね。駐車場もたくさんあって、バスも一時間に二本は来ている。こんなに広いものだから、ほぼ山の上という立地をしているのだろう。土地が安いしね。

私は、慣れた手つきで正面玄関に入っていく。手つきっていうけども、実際は自動扉なので手をかざすだけってというか、そんなのも必要ないのだけれど……。とにかく、私がここに訪れるときは、そのたびに正面玄関から出たり入ったりしていると考えてほしい。受付のお姉さんが軽く会釈をした。つられて私もぺこり。

お目当ての階は五階。エレベーターの表示は六階を示していた。まだエレベーターが下りてくるまで時間がかかるだろう。そんなに暑い天気ではなかったが、一休憩。ちょっと喉が乾いてしまった。あの坂道を歩いてきたのだから当然である。一番近い自販機は……。

休憩所と書かれた案内表示は一回につき一か所ある。その中でも一回の休憩所には豊富な自販機、つまり飲み物が豊富に完備されている。缶やペットボトルはもちろん、紙コップのもの、引いてはビンのものであってある。食べ物だってある。それ故に、利用する人も多く、私がここに顔を出すと誰かしら人がいるのだった。今日は、よく見る顔の人だった。

「只見先生、おはようございます」

なぜだか、しっとりとした挨拶の仕方になってしまった。

「あー、北条さんだね。おはよう」

休憩所には二つのベンチが真ん中に並べてある。その一つを占領する形になって寝そべっている男の人がいた。只見先生である。挨拶すると只見先生は上半身を起こした。

「あははは、何か変なところ見られちゃったかな？」

先生は手に持っているビンをぶらぶらさせた。

「こんなところで居眠りしていていいんですか？ 疲れてるんだらうなーってことは分かりますけど」

「いやー、今は休憩時間だからいいんだ。……でもさ、寝る場所がもう満杯で。ちょうど栄養ドリンクもあるしここに流れ着いてきたって感じかな」

流れ着いてきたとは言い得て妙だ。徹夜明けなのだろうか、髭が無精になっているさまは浪人をイメージしてしまう。

「それでその髭なんですね」

只見先生は髭に手を当てた。うーん、マンガム。いけない歳がばれてしまう。といっても私は若いのだから胸を張っていればよいのだ。張るほど胸はないのだけれど。

「男は髭がのびちゃっていけないな。……そうそう、南條クンならもう起きているよ」

なんだろう、くんに引っかかるものを感じる。先生はこの土地出身じゃないから、くんがクンになってしまうのだろう。たぶんそうである。と、なんだか先生を訛りのある人という認識でとらえていそうだが、そうではない。先生は寧ろ都会の出身だ。しかも大都会。本来ならば私の方が標準からして見ればずれているのである。構わず先生は話を続ける。

「あの子には感心させられるよ。今日は寝顔を拝めるかと思ったら、もう本を読んでいたんだ」

ピシッという音がした。どこかが軋みをあげたような、何かが割れたような音。おかしいなー

、なにもそんな音をあげるようなものはないのに。それはそうと、只見の野郎を一度糾弾した方がいいのかな。「寝顔」だと？ そんな軽々しいものではない。時代が違えば「神聖ニシテ犯スベカラズ」となっていてしかるべきものだ。当然私は確認済みである。ピシ、ピシピシピシ。やっぱり音がする、なんでだろう。

「ま、まあ、僕はここで退散するとするよ。……何か寒気がしたからね。彼女に会うのなら、上手くやってくれよ。といってもそんな助言は不必要かもしれないけど」

エレベーターは一階で待機していた。ラッキーである。二本の缶を両手で持っているために、ボタンは必然、ぐーで押すことになった。私のほかに待っている人もいないので早速乗り込む。

箱の中は冷房が利いてとても快適だ。若干肌寒いような気もするけど、一番冷たいのは手の中である。がちりと缶を握っているためにすごく冷たかった。一つはレモネード、これについては初めから飲もうと決めていた。もう一つは……、例えば炭酸系。コーラやペプシ、ドクペ、ジンジャエール、セブナップ。お茶系統をいけば紅茶から麦茶、緑茶、チャイなどもある。うーん、と一体私は何を選べばいいのだろう。まさかカップヌードルをもっていくわけにもいかないし。栄養ドリンクなんかいいかなと思ったのだけれど、体より精神に癒しが欲しい年頃である。仕方ない、私は意を決しボタンを押す。

表示は、おしるこ。私が最終的に下した判断はおしるこだったのだ。おしるこ、漢字で書けばお汁粉。小豆の汁の中に、餅を入れた飲み物だ。すこし立ち止まって考えてみるべきことがある。お汁粉って粉という字が入っているけど、別に粉物ではない気がするのだ。だって、入っているのってお餅じゃない？お米をつぶして丸めたものじゃないか。確かこの話は一度誰かとした気がする。

妄想という名のブレインストーミングを終えると、既に階数表示板は5を示していた。

エレベーターをでて左手にまっすぐ。そして一番奥の部屋に彼女はいる。コの字の書き始めにあたる場所にあるこの部屋は、建物の内側に当たる中庭を一望できる絶好の地点なのである。

その特等席の主がベッドの上に何時もいるのだ。南條八咫、彼女は真っ白な部屋で、本を読んでいる。

「おはよう、八咫」

私はいつもどおりに彼女に話しかけた。

「おはよう、白虹。今日もとても良い日だね」

彼女は、毎朝本を読んでいる。きまって、挨拶をすると目を上げ、本を閉じるのだ。彼女の読んでいる本はとても分厚くて私には読めそうになかった。というか私にそこまで一つの本を読み続ける体力がない。読書離れここに極まれりといった相である。ハードカバーの表紙は擦り切れてしまっていて、何と書いてあったかは分からなくなってしまっている。本を開けば、題名はすぐに確認できるけど、人が何を読んでいるかは私には興味の外であった。……訂正、本当は見たことあります。私はまだ表紙が健在だった頃のものを知っている。確か、どこか遠い国の詩が集められたものであった。

「そうそう、今日は八咫にお土産があります。はい」

「ありがとう。……なんで、「お汁粉」なの」

さもありなんである。確かに特に彼女がお汁粉好きというわけではない。

「なんていうかさー。こういう日には急にお汁粉飲んで一ってなるでしょ」

「ならないよ、強いてなったとしてもそれは冬に温かいお汁粉じゃない？」

う、正論。ここまで来たら勢いでお汁粉のボタンを押してしまったとは言えない。なんとしてもレモネードは死守したい。

「ほらほら、かき氷とか思い出してみよ」

「うーん。わたしがかき氷で思い出すのはせいぜいイチゴとかレモンとかブルーハワイとかキウイだよ」

キウイ！？ まさかの初耳である。緑色の感じなのか。

「違うよ、ゴールデンキウイ」

ゴールデンキウイなんて正統派キウイの後に出て来たくせにそんなことになっていたとは！？

びっくりだよ。しかも黄色でレモンと被っちゃうじゃないか。

「それがかき氷の件はどうなったの？」

「八咫が変なこと言うからじゃないか。……ともかくかき氷には宇治金時っていうジャンルがあるのは知ってる通りだと思うの」

「さすがに私だって知っているよ。抹茶に練乳に……」

……小豆である。夏の風物詩に小豆が含まれていること、即ち小豆が夏の風物詩としても捉えられるのではないか。なんてことを私は思ったのである。当然後付けだけど。

「なるほどね、そういうわけなんだ。……そこまで主張するなら、わたしは甘んじてお汁粉を戴くとするよ。しかも珍しく御前汁粉だしね。わたしはつぶし餡よりも濾し餡の方が好きなんだ」

二本の缶が汗をかいている。次第に日差しが強くなってきていて、お昼が近付いていることが分かるようであった。

「ふう、お腹が空いてきちゃった、もうお昼かな。何か食べに行こう」

お昼に誘うのは決まって私の仕事である。八咫といえば、本に御執心だ。擦り切れて手垢にまみれた本を毎日めぐり続けている。本当に本が好きなのだとは私は感心してしまう。一方私は何をしていたのかというと勉強の真似ごとである。近々に提出すべきあれやそれやが溜まってしまっているからね。どうして締め切りが近付かないとやらないのだろう。嫌な性分だ。かつて一度、このことを八咫に聞いてみたことがある。

「わたしは期限が出たときにやってしまうよ。……本の続きはゆっくりと読みたい主義なんだ」

といって、本を見せつけてきた。まったく、こうはなりたくないものである。

「そうそう、わたしは白虹に注意をしなければならないよ。白虹は期限ぎりぎりになって私に頼って来るんだから、もう少し早く始めれば自分で解けるし、自分のためになるはずだよ。確かに私は答えを持っているけれど、白虹もちゃんと一人でも解ける問題ばかりじゃないか」

そして、注意まで受ける始末である。ぐーたら自慢は八咫のまえであまりするべきではないと私は学んだのであった。その後、チュー意？（チューしたいの意の略）などというとんでもない

返答をしたら、チョップが返ってきた事を思い出した。若かったとはいえ何をしていたんだ私。

お昼は食堂で食べることとなった。八咫はそばで私はカレーライス。八咫のメニューはころころと変わるけれど、私は一貫してカレーライスを注文している。ふだん私がカレーライスを作ると茶色を濃くしたような色になり、それでいてとても辛い。もちろん、私が作るカレーはおいしいので、たまに鍋でこっそりと八咫に持ってきてあげたりしている。そして毎回怒られるのだ。

「白虹は毎回カレーライスだね。何かカレーライスに恨みでもあるの？」

「別にカレーライスに恨みなんてないよ。私の好きな料理だし、作るにしても食べるにしても。……まあ言うとならば、ここのカレーはおいしい」

この食堂のカレーは私の茶色カレーとは異なっている。一番はその色だ。黄色いカレーなのである。初めて私がこいつを食べたときは戸惑ったものだった。黄色い外見からはお子様用の甘口が想像できる。確かに一口目は甘さが強調されていた。しかし、二口、三口するうちに辛さが尾を引くようになる。なんだこの感覚は、おいしい！ ということで私は見事にはまってしまったのである。

「わたしは、辛いカレーが苦手なんだ。たまにならいいけど毎回は食べられないよ」

とは八咫の談。女の子の子しているというか、私が八咫を好きなところはそういうところではあるのだけれど、食の趣味だけは似通ってほしいなというのが私の本音だ。

「白虹、誤解しては駄目だよ。わたしはあくまでも辛いカレーが苦手なだけだからね。四川風の辛い麻婆豆腐とかは好きだよ」

汗をかきながらハフハフとレンゲを口に運ぶ八咫の姿が脳裏に浮かんだ。烏の濡れ羽根がとても艶やかではないか。今度、外出許可が出たら麻婆豆腐を食べに行こう。

「……というかなんで八咫は私が毎回カレー食べてること知っているのさ」

「わたしの部屋のノートに書いてあったよ、毎日ね」

お昼を食べた後、二人して部屋に戻る。

日差しは傾きかけて、一日でも最も暑い時間が訪れる。お昼ご飯を食べた後というのはすごく眠い。私としては惰眠をむさぼるのもやぶさかではない。しかし、八咫がノートにペンを走らせているのだから私だけ眠りこけているわけにはいかない。部屋に備え付けてあるテレビを付ける。お昼過ぎとあっては、私は一つしか見る番組を知らない。「午後のロードショー」である。

「映画を見ようと思うんだけどー、八咫はどうする？」

八咫は手をひらひらと振るとノートから目を離さないでいた。私が翻訳するところの、わたしは忘れないうちにノートに書かなくちゃいけないの、だから白虹の好きにしてね、という意味である。

八咫の邪魔をしてはいけないので一人番組を見る。「午後のロードショー」といえば有名どころからB級どころまでを網羅してくれるお得な映画番組である。たいてい古い番組であることが多いのだが、たまに新しめのものを放送するので侮れない。今回の映画は『ミスト』であった。案外新しめのものが来たものだ。

パニック映画というものを私はどのように楽しんでいいかわからない。そんな私にも、画面の中に映っている、彼らの動揺や戦慄といったものが理解できないわけではない。理不尽な状況に、訳の分らぬまま落とされる。なんて恐ろしいことだろう。私は絶対に経験したくはない。でも、そのような状況を考える必要があるならば、私はどうするだろうか。どのように振舞うだろうか。主人公たちのように、調和を求められるだろうか。理不尽に与えられた現実と戦うことができるだろうか。

きっと私には無理だ。無理だから、きっと私は八咫と同じ道を辿ることになるだろう。せめて自分だけは守らなければならない。いや、違う。八咫には失礼だけど、自分だけは守らなければならないって良い響きだ。もっと生臭い、自分だけ助かればいいやという選択だ。外の世界、他の人間たちなんて知ったことではない。そんなの後回しだ、どうなって構わない。自分さえ守り切れればそれでいい。結局は自分が一番なのだ。

ぐるぐると思考が回転する。私もぐるぐると回転する。排水溝を流れゆく髪の毛のように流れていく。このままどこに流れて行ってしまうのだろう。濁流のような下水に混ざって流れていく。呼吸が苦しいけどいたしかたない。ここは水中だ、しかも泥水のような中。髪の毛には泥がこびりついてしまって気持ち悪い。きっと乾いたらガビガビになってしまうのではないかな。とっくに苦しいのはなくなってしまっていた。ただ流れに身を任せて流れていく。このままどこに行ってしまうのだろう。結局流されて流されぬいて辿りついたのは元の洗面台の中であった。

ぱちん、という破裂音がした。

目の前で八咫がベッドから顔をのぞかせていた。

「まったく、白虹が見るって言ったんじゃないか。映画はもう終わってしまったよ。せっかく原作とは違うラストなのだから眠ってはだめ」

微妙に怒ったような八咫の顔。垂れた長い髪が私の顔をくすぐる。わー、すごくいい匂い。くんくん。あれあれ？ いろんな匂いがするぞ。ベルガモットにシダー、パルマローザ、ローズマリー、ゼラニウム。加えてグレープシードにアプリコット。とてもいい匂いがしております！

もうちょっとこのままでいたい。いい匂いでしかも艶がすごくあるなんて反則じゃないか。どんだけいいシャンプー、コンディショナー、ヘアパック使っているんだよ。少しは私にも分けてほしいものである。

「んあ、寝ちゃってたかー」

垂れた涎を拭う。

「駄目だよ、せめて寝るならちゃんとテレビを消してからじゃないと。……まあ、でも今回は消してないおかげでわたしが少し得をした気分だよ。まさかラストを変えてくるとはね。私は映画版の方が好き」

八咫はとても目を輝かせていた。ふだんの理知的な雰囲気もいいのだけれど子どものようにはしゃぐ八咫もとってもかわいい。かわいい。大好物は物語です！ 気軽に触れないでください。怖いお姉さん（私）が襲ってきます、といったところだろうか。うんうん。

映画が終わったということは、4時がもう目の前ということである。私もそろそろ帰らねばならない。八咫の整頓されたスクラップや壁に貼られた膨大なメモ帳とは対照的に、私がぶちまけたノートとか教科書は散乱していた。すばやくまとめてリュックサックにドーンである。と、その時リュックサックの中からお茶の袋を見つけた。というかなんで忘れてたんだ私！ 朝、八咫を喜ばそうと仕込んできたジャスミンティーである。毎回このお茶を見せると怪訝な顔が、それこそ花が咲いたように、ぱあっとなる。いつみても愛らしくていじらしい笑顔だ。憎いぜ。

「なんだいその球状のものは？ ふんふん、お湯をかけるんだね。わ、わ、わ、すごいねこれ！ わーきれいだ。香りはちゃんとジャスミンティーだね。この花は何ていう花なんだい？」

茉莉千日香、新芽をまるで球のように束ねて作った工芸茶である。茉莉の名がついているように、ジャスミンティーである。しかしながら、工芸茶であるので、ただのお茶ではない。新芽で作られた球の中心部には千日紅の花が隠されており、お湯を注ぐことで、新芽が弁のように開き千日紅が咲いたようになるのだ。毎回のことでではあるが、やっぱり八咫に喜んでもらえるとうれしいものである。このお茶は彼女の琴線に触れる何かを持っているのだろう。そうでなければ毎度毎度同じようなアクションをとってくれるはずがない。

まったりと二人でお茶をたしなむ。一日の終わりとしては上々ではないだろうか。

いくら陽が伸びているとはいえ、時刻は午後6時近く。そろそろ私はお暇しなければならない。

「そうだね、そろそろわたしの夕食も来るころだ。また明日かな？ 白虹」

「明日は少し遅れることになりそう。午後には来ることができると思うよ」

そうか……、なんて八咫は呟くと、メモ帳にさらさらと筆を走らせ、机の真ん中にぺたりと張り付けた。

「それじゃ、私は帰るね。また明日」

扉に手をかけると私は部屋を出ようとした。

「ちょっとまって、白虹」

出ようとしたのだけれど、引きとめられてしまった。

「私のメモに『件に気をつけろ』と書いてある。しかも日付は昨日のものだ。知っているかい？」

「うーん、昨日私はそんなこと聞いてないかな。昨日私が帰った後に書いたんじゃないかな」

そんな話は初耳であった。そもそも件ってなんだ？ 件の話はどうなったとか、そういった類の話だろうか。

「うーん、気をつけろなんて強い語調、わたしは使わないからね。一応気をつけるんだよ、白虹」

はい、と良い返事をして私は八咫の部屋を出た。私を見守るように、八咫はひらひらと手を振っていた。

帰りはバスで帰ろうと思い、私はバスに乗り込み、駅へと向かう。街はすっかり茜色に染まっ

ていた。茜色だと何だか温かみがあるけどこれを朱色というと黒が混じってちょっと恐ろしげな色を見せる。そんな感覚にとられるのはきっと私だろうなと思ってバスの中を見渡す。老若男女、性別も年代も違う人たちがバスには乗っている。それぞれがそれぞれに振舞っている。例えば寝ている人とか、会話をしている人、携帯をいじっている人、そして私のように窓の外の風景を眺めている人。本当に様々な人がいるんだなーって感じてしまう。

私は窓の外の風景を見るのが好きだ。窓一枚あるだけで、外の風景とは切り離されているように感じる。ちょっと難しく言うと客観的に風景を見ることができるような気がするのだ。見ている時点で主観でしょ、といった突っ込みは無粋である。

窓の外をぶらーっと見ていた。隣の車線に行く車とか歩道に行く人々、眩しいビルたち、街路樹も忘れてはいけない。その全てが街の構成員であって風景である。しかし、街の真ん中にある公園に、バスが差しかけたときに寒気がした。ちょっと冷房が利きすぎているからかもしれない。私は、中腰になると、冷氣口の位置を変えて……。

そつのない動作の中で、私はずっと窓の外を見ていた。茜色と木々の影が合わさった朱のなかに、着物の女性が立っていた。私の眼は完全に彼女に釘つけにされてしまった。磔刑にされてしまった私の心は彼女以外に意識が行くことがあたわない。同時に脳内で鐘が鳴り響く、ファンファーレの一部などではない。警鐘そのものである。

着物の女性は、いや、身長的にそこまで年のいっている女性ではないみたいだ。いわば、童女だろうか。振袖の姿は七五三を想像させる。髪型はおかっぱではなくショート、黒い髪には一本一本が太いことを思わせる艶が見て取れる。時間にすれば一瞬である。しかし、私は彼女について記憶しなければならない。何故だか、私にもわからないけど、見てはいけないと思うと同時に、詳細に記憶しなければならないという使命感を抱いていた。ここ数年間の間で私は、「なんだかよくわからないもの」を仔細に覚える癖がついてしまった。「わからないもの」はとっても怖い。結局は、自分の理解を超えたものを誰かに解説してもらいたいのだった。もちろん、八咫に、である。

そして、彼女が振り向いた姿に私は戦慄する。七五三の童女は果たして牛であったのである。顔から下は童女の風体であって、ご丁寧に手鞠まで持っている始末である。しかし、顔はまさしく牛の顔をしており、小さな体に大きな頭が不釣り合いだった。振り向いた際にも、ふらふらとしていたから、とても不格好であった。

牛子ちゃん（仮）はニツツという笑みを作った。口角はあがり、目が細くなる。私はこの時初めて、牛の笑う姿を見た。というか、そもそもこの牛子ちゃんを牛という範疇に入れていいか甚だ疑問である。正直、こんなにも余裕をかました体でいるが、本当はもっと怖かったのである。牛人間とかなんだよ、怖すぎるだろ。しかも私を明らかに見たうえで笑ってくるし、照準付けられているようなものである。寒気の正体は彼女からきているものだった。

牛子ちゃんの口が動く、口元に全神経が傾けられる。あいにく私に読唇術の心得はない。車内にいる人間と外にいる人間では意思の疎通は難しい。会話も例にもれず、窓があいているかしないとコミュニケーションはとれない。そんなことは百も承知の上だ。でも、私は見続けていた。

全ては数秒足らずの出来事であった。私の視界から牛子ちゃんがいなくなるまで、いなくなる

までの出来事。最後に牛子ちゃんは、血涙をながし、鼻からも血を流し倒れてしまった。  
私の見た物語はここでおしまい、めでたしめでたし。

「ふーん、なるほどね。牛に女の子か……。わたしが知っているのだとすれば二つだね」

流石に夜に八咫を訪れるのは気がひけたので、次の日を待って朝一番に、彼女の元を訪れた。  
八咫はいつも通り、本を読んでいた。あいさつもそこそこに事の顛末を述べたわけである。

「『牛御前』か『件』のどっちかだね。今回の白虹の話を知ると『牛御前』の線は薄いね。『牛御前』は『牛鬼』っていわれる鬼なんだ。磯女と同じで海岸沿いによく出現する。幸いこの街には海がないし、出ることはないだろう。だから、今回の牛子ちゃんは『件』だね」

『件』という昨日の私が、八咫に注意を促されたものだった。事柄って意味ではなくて、妖怪の類だったのか。そうならそうとちゃんとおいてくれればいいのだ。

「昨日のわたしから聞いていただって？ んー、わたしにもそれなら非があるかな。ちゃんと説明していればよかったし、……。それにね、『件』に出会った後の対処法は何もないんだ。だから会ってしまうのだから偶然、何も気をつけることなんてできないんだ。まあ、白虹がトラウマになっていないのが幸いかな」

いやいやいや、私だって立派にトラウマを負っています。少しは人よりも鈍感かもしれないけど、血を流して倒れたシーンなんか完全にホラーだった。しかし、牛が笑う姿を見れたのは貴重な経験だったと私は思う。

「その『件』って一体どういうものなの？」

「『件』というのは予言者だとわたしは思う。記録に残り始めたのは江戸時代なんだ。その時は牛の体に、人間の顔がついている姿をしていてね、当時の史料に残っている。でも、白虹が見たのは女の姿をしていたんでしょう？ それは大戦中に流行った牛女だね。人の体に牛の頭、空襲の後などによく見られていたそうだよ。両者は、姿は違うけれど、予言をすることでは一致している。不幸を、災厄を予言するんだ。予言したら死んでしまう。これじゃ、なんにも手の打ちようがないよ」

八咫は顎に手を添えて頷くような動作をしている。彼女は『件』についてもう何もすることは無いというのが本当にそうなのだろうか。私はなんだか不安になってしまった。八咫は気にも留めていないけれど、災厄を予言したのならば、近いうちにその災厄が訪れてしまうということではないか。私たちに出来ることは本当はないのか。

「うーん、そういわれても困っちゃうなあ。まあ、幸い何も白虹は聞いていないんだし、あるがままを受け入れるしかないね」

薄情な女の子である。これでは、今回の件は私一人けがをしたみたいだ。

「そう、だから今回のお話はわたしたちには何にもできないんだ。だから、白虹が『件』に会った時点で終わっている物語だよ」

【完】



ハートキャッチミラージュ

浦木 英智

朝が来て、そしてまた今日が来た。

昨晚動かした机は元の位置に戻っていたし、本棚から出した本も全て元の場所に整頓されていた。そして何より、携帯電話の日付が今日だった。また今日にたどりついてしまった。これで、もう四回目の今日だ。

私は、今日に閉じ込められた。

繰り返す今日の中で、気付いたことが一つある。そしてそれは同時に、繰り返す今日の中で、唯一変化していることだった。

この閉じた世界には、私が二人いる。正確には、「私とは別の場所に生きる、私にそっくりな誰か」がいる。もう一人の私は、今日をループする毎に、私に近しい誰かのもとに出現した。そして私はその度に、「どうしてあんな所にいたの？」等と聞かれて、戸惑うのだった。

ドッペルゲンガーは死の予兆。繰り返す今日は、単調な日々のメタファー。……だとして、私にどうしろと言うのだろうか。一日々々を大切に生きなさい、とかそれらしい教訓を説きたいのだろうか。なら、直接会いに来て口で言えよ、と思う。

とか、そんなことを回転の鈍い頭で考えていた。非日常的な状況に、頭は余計にぼんやりしていた。

仮病を使って学校を休むことにした。ささやかな抵抗だった。これで少しは、現状に揺さぶりをかけられるかもしれない。せめてもの償いに、母親に忠告してあげることにした。出勤中は足元に気をつけること、九時からの特番は期待した程は面白くないこと。

揺さぶりの結果なのかどうかは分からないが、その変化は意外過ぎる程にあっさりと、私の前に現れた。

「よう、妹。ただいま」

「おかえり、お兄ちゃん。学校どうしたの？ 辞めたの？」

「大学はそっちと休みの期間が違うんだよ」

「よかった。お兄ちゃんから勉強を取ったら、きっと何も残らないもんね」

「……お前、辛辣な言葉を吐くようになったな」

そっちこそ学校どうしたんだよ、と聞いてこないのは、彼なりの優しさなのだろうと思う。勉強を取ったら何も残らないなんて嘘だ。彼は、妹思いのお兄ちゃんなのだから。

そして私は確信する。『今日、もう一人の私が訪れるのは、彼のもとだと。』

ドッペルゲンガー。二重の歩く者。生きている人間の霊的な生き写し。自分の姿を別の人が違

う所で見ると、または、自分がもう一人の自分を見る現象。一説によると、ドッペルゲンガーの特徴は、もう一人の自分は周囲の人と会話はしない、その人にまつわる場所に現れる。もし、もう一人の自分に会ったら、罵倒して退治した方が良く。何故なら、この現象を見た者は、死期が近いという言い伝えがあるからだ。

「……ずいぶん詳しいんだね」

「そうか？」

「ちょっと妹をひかせるくらいには詳しいよ」

「いろいろあったからな」

「オカルト研究会にでも入ったんだっけ？」

「いや、天文部」

天文部で何があったら、こんなにもドッペルゲンガーに詳しくなれるのだろう。

「そうだな……じゃあ、そいつを捕まえよう」

「はい？」

あまりにも糞真面目な返答に、声が裏返ってしまった。

「そいつがお前を`今日、に閉じ込めた張本人なんだろ？ んで、この周回では俺の前に現れる。なら話は簡単だ。そいつを捕まえて、退治すればいい」

「……信じるの？」

こんな荒唐無稽な、夢物語のような、馬鹿みたいな（その上、全ては私の予想に過ぎないから、何の確信もない）話を。

「他の誰かに言われたんじゃあ、信じないさ。実の妹だから、信じるんだよ」

「馬鹿じゃないの。意味分かんない。この、シスコン」

しかし私は、嬉しかった。頬の筋肉がふるえて、それを隠すために手で押さえる程度には、嬉しかったのだ。

「全ての兄がシスコンとは限らないが、シスコンはすべからず誰かの兄なのだよ」

「ごめん、それは本当に意味分かんない」

私は、未だかつて経験したことのない、今後の人生でも恐らく経験することはない、「実の兄を尾行する」という珍しい経験をしていた。

兄は、首を振ってあちこちに目を配りながら歩いていた。街で見かけたらまず関わりたくないタイプの人である。そしてそれを物陰からこっそり尾行する、というのは、中々シニカルなシチュエーションだ。

どれくらい、実の兄の背中を観察していただろうか。あたりは薄暗くなっていた。そしてついに、その時は訪れた。思わず「出た」等と口走っていた。

私は見た。私ではないもう一人の私を。私と瓜二つ。いや、そのままコピー&ペーストだ。驚きのあまり、息が詰まってうまく呼吸ができなかった。

「よう、妹。久しぶりだな」

兄が、もう一人の私の腕を掴んでいた。決して逃がさないと、そう言っているように見えた。

兄はもう一人の私と並んで歩いていた。その手首を掴んだまま。私ではない私と兄が手を（正確には、手と手首を）繋いでいるのを見て、複雑な気分になる。と同時に、最後に兄と手を繋いだのはいつだっただろう、と思う。

二人は夜の街を歩き、そして、小学校の中へと入っていった。どんな口説き文句を使えば、小学校に女性を誘うことができるのだろう。あるいは、兄が大学で学んでいるのは交渉術なのかもしれない。

夜の学校は、誰もいなくて、冷たいくらいに静かで、がらんとしていた。だから、楽しそうに話す兄の声が余計に響いて、私はそれを頼りに二人の後を追った。

「これこそまさに『シュレーディンガーの猫』だなんて思ったね！」

兄一人だけの笑い声が聞こえる。ドッペルゲンガーの冷ややかな反応が目に見えよう。しかし、小難しい用語を用いた小洒落た小粋なトークなど、以前の兄からは想像もつかない。大学生活というのは、それほどまでに人を変えるものらしい。声が遠ざかるのを確認して、私は階段を駆け上がった。

それを見たとき、私は驚きに声を上げていた。いや実際には、少々こぼれた程度で、すんでの所で踏みとどまった。

階段の踊り場に、もう一人の私が出た。

それが大きな鏡に映った自分だと気付くのに、そう時間はかからなかった。呼吸と鼓動を整えながら、鏡に近づく。そっと手を伸ばすと、鏡越しの自分も同じように手を伸ばした。そうして二人の手が重なる。

この世界には、二人の私がいる。彼女と私には、どれ程の違いがあるのだろう。もしも、見た目も中身も全くの瓜二つだとしたら。どちらか片方がいなくなっても、この世界は何の差し支えもなく回り続けるのだろう。ならば、彼女は何者だろう。私とは、何者であろう。

「あなたは、誰？」

鏡の向こうの自分は、何も答えない。だから今度は、語気を強めて言ってみる。

「お前は、誰だ」

「何やってんの？ お前」

突如として聞こえた兄の声に、跳び上がる程驚いた。しかし悲鳴は我慢した。

「な、なんでもないよ。うるさいな」

少しだけの気まずい沈黙の後で、兄は口を開いた。

「あいつを追いつめた。音楽室に閉じ込めたよ」

「いいか、自分を強く持て。負けちゃだめだ。あいつが何を言っても、拒絶するんだ」

音楽室に向かって歩く私の後ろで、兄は言った。

「『お前なんかいない、この世界から出ていけ』って、そう言うんだ」

兄の声が頭の中で反響するような感覚があった。静かに心の中に入ってきて、浸透していくよ

うな感覚。

「じゃないと、存在を乗っ取られるぞ」

ピアノの音が聞こえていた。正確には、聞こえているのに気付いた。音楽室に近付くにつれて、音は少しずつ鮮明になる。

音楽室の前に立つと、その音は「ここにいる」という確かな存在感を伴ったものになっていた。

「……ここから先は手伝えない。だから、一人で頑張れ」

私は、振り向いて、できるだけ笑顔を作って言った。

「じゃあ、行ってくるね。お兄ちゃん」

「ああ、お前なら大丈夫だ」

どこか懐かしいような気分になった。もしかしたら、兄といつかどこかで、同じようなやりとりを交わしたのかもしれない。

扉に手を掛けると、音がぴたりと止んだ。

そこには、私がいた。グランドピアノに座って、両足をぷらぷらとしている、私がいた。月明りに照らされて、闇から浮き出るようなその姿は、どこか幻想的で、どこか蠱惑的だった。

「やっと会えたな」

それはこっちの台詞だ、と思う。

「あ」

ひどくかすれた声だったが、それでも、振り絞るように声を出した。大丈夫。まだ喋れる。まだ、闘える。

「あなたは、誰？」

「おかしいことを聞くなあ。俺は、お前だよ」

「どうして、こんなことをしたの？」

「気に障ったか？」

「当然」

「お前の日常だって、さして変わらねえだろ。同じ事の繰り返し。変化のない毎日。……それに、気付かせてやったんだよ」

「あなたの、目的は何？」

「お前と取引がしたい」

とりひき、と口の中で反芻する。

「お前も、心のどっかでは飽きてたんだろ？ この日常に。そうじゃなきゃ、俺は生まれねえ」

ドッペルゲンガーは、グランドピアノから飛び降りた。

「変えたいと思わねえか？ この日常を。面白くもねえ毎日を。味のない食事を続けるような日々を。俺とお前が力を合わせれば、それができる」

私に向かって歩きながら、続ける。

「本当は、うんざりだろ？ 延々と続く惰性のサイクルから、抜け出したいだろ？ どうせ繰り返しなら、ぶち壊してやろうぜ。俺に任せてみろよ。だから、なあ」

そして私の耳元で囁くように、言った。

「代わってくれよ」

誘惑のような、脅迫のような、甘く、冷たい声だった。

「私さ、あなたのこと、嫌いじゃないよ」

数瞬の沈黙の後、私はそう言った。

「言ってる事、間違っていない。それに、とっても私好みだし」

自分が自分に言う事なのだから、私好みなのは当たり前か、と思う。

「でもさ、私はこの日常が好きなんだ。なんだかどうしようもない毎日でも、好きなんだ。誰に何て言われたっていい。単調で退屈でも、幸せだって思える瞬間がある。それに……」

それに、とっても大切な人が背中を押してくれたから。あの時、やたらとドッペルゲンガーに詳しい兄の言ってくれた言葉が、ふわふわと蘇り、そして消えていく。シスコンには相応の愛で応えてあげないと、ばちが当りそうだ。

「『お前なんかいない、この世界から出ていけ』」

ドッペルゲンガーは、にやりと笑って、「お前、変わってるな」と言った。

「普通は、言い淀む。迷う。人はもろい生き物だからな。そしたらこっちのもんだ。気付いた頃には、入れ替わってる。……ある日突然、今までと違う事言い出す奴とか、いねえか？ なんだか急に堕ちていく奴、まわりにいねえか？ みんな、入れ替わったんだよ」

それから、踵を返してグランドピアノの方を向く。

「まあ、俺が恋しくなったら、いつでも呼べよ。俺は、お前だからな」

迷いなく歩を進める。まるでそこに何も無いみたいに。

「じゃあな。またどっかで会おう」

そうして最後の一步を踏み出して、消えた。

最初にする事は決まっていた。携帯電話の兄の名前を検索して、電話をかける。

「もしもし。おう、俺だ」

「うん、お兄ちゃん」

「ひさしぶりだな。丁度良かった」

「……え？」

「明日あたりそっちに帰るから、母さんにそう伝えてくれ」

「……」

「……ん？」

「……」

「えーと」

「……あのさ」

「何だよ」

「ドッペルゲンガーって、知ってる？」

「……なんだそりゃ。知らないな」

「お兄ちゃん」

「何だよ」

「ありがとね」

それから、甘い誘惑と身体健康には気を付けるように言う私をいぶかしむように、兄は言った。

「なんだかやけに気にかけてくれるんだな。お前ってそんなかんじだっけ？」

私は、「やだなあ」と前置きして言った。

「私は前からこうだよ。入れ替わってないよ、大丈夫」

「今日、は二度と、来なかった。」

おわり

あとがき

本当は、「ぼくのかんがえたさいきょうのプリキュア 第十四話 『変身できない？ プリキュア最大の危機です！』」を同時掲載したかったのですが、時間の都合（卒論とかいう意味の分からない制度）と、「これ、もうプリキュアじゃなくね？」という自問自答の結果、掲載を見送ることにしました。

最後に謎の文字列を。

にこびでお.jp/watch/sm11430519

「あ、安部礼司 2010年07月18日 第224回」

その町にはある噂があった。

いわく、町はずれの廃駅には化生が住むという。廃線の先には異界があり、それは訪れた人をそこへ引きずり込むらしい。

そんな稚拙な噂話が子供たちの間で囁かれていた。

1

夕暮れの日が世界を侵す。

空が、人が、灰色な町がどこまでも赤く染まり、斜陽の中に長い影が伸びる。何もかもが濃淡の強調された黄昏色に堕ちていく。茜色の宙を舞う鳥の声、帰路へ着く人のざわめき、夕の喧騒が聞こえた。肌に沁みる空気にはもう冬の香りと、冷たさが混じっていた。

「ここが……夜泉（よみの）駅」

そんな十一月の夕刻、灰野薄（すすき）は町はずれの廃駅にいた。喧騒から逃れたここは静寂に沈んでいる。中身の薄いバックを肩に提げ、虚ろな灰青色の瞳で暗い駅を眺めていた。

塗装も剥げ落ちた、朽ちた小さな木造の駅舎。落ち葉に覆われた低い階段の先に入り口が見える。その奥、プラットホームへ続く改札口は暗く、何かが居るように思えた。目に映る全てがわけのない不安と狂気を網膜に張り付ける。静かに、重くのしかかるような逢う魔が刻の雰囲気の中で、ここは一層陰りを濃くしているようだった。

「噂通り、気味悪いとこだな」

思わず声が漏れる。

この夜泉駅には化生が出るという噂——それは薄が中学生になったばかりの頃、この駅が廃止されてから流行ったものだった。廃止になってから町はずれにあった無人駅だったここは、人が近づくことすらなくなった。古い駅舎だったこともあり、朽ちてしまうのも早かった。そんな夜泉駅が人を寄せ付けなくなる雰囲気を纏うのにはそうかからなかったのだ。だが、原因はこれだけではなかった。

町の何人かが夜のこの駅の線路の上に立つに何かを見たという。ここの雰囲気に惑わされた戯言だろうと誰もが思うだろう。しかし、そんな事を言いだす人が増えるにつれ、やがて化生の噂が創りだされた。この二つが廃駅の化生の源泉だった。

「まあ、関係ないか。誰も来なければ、それでいい」

呟く薄の口許には自虐の濁いた笑みが浮かんでいた。

そう、彼は別に怪異目当てに来ている訳ではない。ここが決して誰も来ない場所、そうであれ

ばよかったのだ。これからするくだらないことには、誰もいない方が都合がいい。

落ち葉を踏みしめながら入口へ向かう。入口を潜ると途端に影の濃度が濃くなり、背筋を冷たい風が撫でた。冬の香りに混じって、どこか錆びついた臭いが鼻をつく。口の中に入る空気は埃っぽく、思わず咽る。言い知れない負の感情を煽る雰囲気は駅の中にあった。

しかし、それら全てを無視して薄は進む。ここに何があろうとそんなものは自分に関係ない。そんな理解不能な不安感より、もっとどす黒く粘つく暗い願望が彼を動かしていた。入口からすぐの改札口を抜けると、廃線を彩る黄色とホームを彩る昏い影が視界に広がった。

「……ここで、十分だな」

肩に提げていた鞆から取り出したのは、ちょうど人の頭が入るくらいの輪が括られたビニール紐だった。

原因なんてものは、もう覚えていない。虐げ、苛め、脅し、同情、憐憫、全てが薄を破滅に導いた。そして、それらは終わってからもありもしない幻聴となって苛み続けた。抵抗の意思を砕かれた薄はもはや自壊するだけだった。

跡形もなく、消えてしまいたい。芽生えた破滅願望。高校生になった今年、その欲求はもはや抑えられなくなった。それを叶えるには夜泉駅はうってつけの場所だった。誰も来ないならば、軀（むくろ）が骸（むくろ）と成り果てるまで見つかることはない。肉が腐り、骨が朽ちるまで誰にも。自分の消滅がここで実現できる、と薄は大きな確信に満ちていた。これが、彼がこの廃駅に来た理由だった。

隅に置いてある椅子へ足を乗せる。錆びついた鉄骨に末端を念入りに何回も巻いていく。なんて単調な作業なのだろうか、と薄は思う。恐怖心も、絶望も、諦観も何もかもが呆気なく抜けていく。無感動な心。これから終わってしまうことが、まるでそうあるのが当たり前のように何も感じられなくなっていた。

やがて、みすぼらしい処刑道具が目の前に出来上がった。

日は既に落ちかけ、空は薄蒼く染まりながら黄昏と夜の境界を跨ごうとしていた。最後の日を眺めながら、薄はゆっくりと首を差し出そうとした――その時だった。

錆びた線路の上に、少女がいるのに気がついた。

驚きで声も出せない。近づく気配もなかった彼女は廃線の上に横たわって、こちらを見つめていた。

セミロング、セーラー服、色白の肌が少女の印象を形作る。しかし、二つの要素が決定的に彼女のそれを異常なものに変えていた。隙間から覗く少女の瞳は金色だった。そして、彼女の右目は義眼だったのだ。

緩慢な動きで上体を起こす。冷たく妖しい金の半眼がじっと薄を見ている。

「死なないんですか？」

小さく桜色の唇が動く。澄んだ声が耳朶を打つ。その言葉には何の感情もこもってないように思えた。少女の雰囲気にあてられたように思考が回らない。



「死なないなら、その紐取ってくださいませんか」

「え、あ」

「だめ、ですか？」

「い、いや……」

薄は何とかして頭を働かせようとするも、言葉に詰まる。少しずつ状況を理解していく思考回路には、失敗したという言葉と、絶望に埋め尽くされていた。

他人がいた。見られていた。こんなくだらないことをしているところを見られてしまった。誰にも見られなくなかったのに。弱みを、握られてしまった。

次々と浮かんでくる過剰な暗い妄想に取り憑かれていく。全身が弛緩して、立っていられなかった。椅子に腰が落ち、頭が自重で傾ぐ。乱れていく呼吸、脈打つ拍動が体を襲う。口許が自然に歪んでいく。

俯いたまま答えられない薄に、敷石の擦れる音が聞こえた。視界の隅にホームの端に座る少女の後ろ姿が見えた。

「あの……それから」

なんだろう、うわべだけの同情と憐憫をぶつけられるのだろうか。それとも、口止め料でも要求するのだろうか。

暗く蒼い空の下、夜に堕ちていく闇の中で、ゆっくりと振り返った金の瞳の少女。薄い笑みを浮かべた彼女の口が開いて、

「その紐で、わたしの首を絞めてくれると嬉しいのですが」

そう言ったのだった。

## 2

薄が理解するまでに長い沈黙が続いた。何度も頭の中で少女の言葉を反芻し、咀嚼する。

彼女は同類だ。自分と同じ、終わりを希う人間だ。それだけが、彼女の微笑みに映っていた。

まだ薄い闇の中に、微かに虫の音が聞こえてきていた。少女の瞳を見つめながら、薄は震えた声で当然の疑問を返した。

「なんで……俺がそんなことしなくちゃいけない？ どうして出会ったばかりの俺にそんなことを頼む？」

「だって、死ぬつもりだったんですよね？ だから、ついでにわたしも殺してほしくて」

「ついでで、あんたを殺すなんてことするわけないだろ」

「それは……そうなんですけど。まあ、お願いですから。聞いてくれたら嬉しいと思っただけです。自分で死ぬのは、まだ怖くて仕方ありませんから」

仄蒼い闇に包まれたホームに座る彼女はあまりに穏やかで、綺麗だった。

薄は鞆に入れてあった鋏を取り出し、透明な紐を切り落とした。

ここには居れない、ここで死ぬことはできない。彼女と一緒に場所で死ぬことはできないし、なによりここは彼女の場所だと思ってしまったから。もうここにいる意味も理由もない。

ビニールの残骸を鞆に入れ、立ち去ろうとする薄に少女が申し訳なさそうな声をかけてくる。「お邪魔して、すみません」

「なあ、なんであんた線路で寝てたんだ？」

不意に脳裏をかすめたくない疑問を投げる。

薄の自殺行為を黙って見ていた少女。初対面の人間に『殺してくれ』と言った少女。自分と同じように破滅を望む彼女は廃線の上で何をしていたのだろう。

「下に……降りてみませんか？」

「下？」

「線路に、ですよ」

金の瞳が薄を誘う。薄は言われるがまま、少女に続いてホームから降りる。雑草と敷石が詰められた道床には、赤く錆びついたレールが走っている。その廃線の先は暗い蒼の空と黒い地面が遠い彼方まで続いていた。この先に異界があるなんてよく言ったものだ、と薄は思う。ここには何も無い、この先にも何も無い。どこまでも終着点を見失った廃線が伸びているだけだ。駅舎とは違う、途方もなく空虚な雰囲気はここにはあった。

少女は薄に問う。

「この先には、何かあると思いますか？」

「この先になんて、なにもない」

「そうですね、それが……当たり前の答えですよ」

少女は無邪気な笑みを浮かべていた。

そして、虚無感に包まれた廃線の上で、細い両腕を広げて、

「でも、この先には何かがある。この先には何かがある。廃線の向こうにはわたしを食べてしまうような、この世界から消し去ってくれるような何かがある。ここにいれば、それがいつかわたしを殺してくれる。そう思うと、とても素敵じゃないですか？」

夢見る子供のように、純粋な死への欲求を彼女は口にした。

そんな姿を見て、薄はどこか胸の奥が冷たくなるのを感じた。

彼女にとって、死は憧れなのだ。彼女はどこか逸脱した美をそれを感じているのだろう。激痛に犯され、感触に嬲られ、苦痛に弄ばれることを、いつか誰かにそうされることを待っているのだ。

しかし、薄にとって死とは一片の価値もない個体の消失に過ぎなかった。救ってくれるものでもない、美しい亡骸と成り果てるものでもない。この世界にいられなくなった愚か者の自分が見つけた、ただの『自分の終わり』でしかないのだ。

少女が望む『死』はいつまでたっても現れないのだろう。彼女もそれはわかっているのかもしれない。だから、ここで待っているだけなのだ。ここから先へ、進むことはないのだ。

長い思考の沈黙、少女は薄をじっと見て目を逸らさなかった。

やがて、薄は渴いた口を開けた。

「いつか、来るといいな」

叶わないとわかっているけど、その憧れを踏みにじる理由は薄にはない。自分と同じく破滅を望む少女。彼女の『死』が終わりを見いだせない妄想になり下がって欲しくなかった。この先もこの夜泉駅に囚われ続ける少女に、言いようのない感情を薄は抱いていた。

少女は金の半眼を見開いて、驚く。しかし、すぐに口許を小さく歪めて、  
「はい」

と、柔らかい微笑みを浮かべた。

### 3

薄が金色の瞳の少女と会ってから、三日が経った。

あれからも町や近辺で絶対に人の寄りつかないような場所を探したが、そんな場所は見つからなかった。遠方で探そうにも雲を掴むようなことだ。現地に直接行くような財力など持ち合わせていなかった。

だから、薄は仕方なく学校生活という日常に戻っていた。戻ったとはいっても、その授業のほとんどを聞き流し、午後にはほとんど保健室で寝て過ごしていた（勿論仮病である）。

そんな、誰とも話すことのない学校生活が、薄の日常だった。

「あいつは、今もあそこにいるのだろうか」

薄は時折彼女のことを思い出していた。

夜泉駅に囚われた金の瞳の少女は、まだあの廃線上でずっと殺されるのを待っているのだろう。存在するはずのない化生が喰い殺してくれると夢見ているのだろう。少し気になってはいたが、何故か彼女に会いに行くのは躊躇われた。

そして、そんな時だった。

放課後の生徒たちの喧騒の中に、夜泉駅が取り壊される噂を聞いたのは。

### 十

もうほとんど沈みきった夕陽の残光が、息の上がった薄の顔を照らしていた。学校から町外れまでは遠く、もたもたしては夜になってしまう。だから、体力に自信のない体に無茶を言って、走っていた。

どうしてこんなに急いでいるのか、薄自身にもわからなかった。動機はあった。あの金の瞳の少女に会うためだ。ただ、何故こんなにも彼女に会わなければならないなんて思っているかは、わからなかった。

駅に着く頃にはもう暗く蒼い空が天を覆い、そこには気味の悪いほど白い月が張り付いていた。

「……なんだ、これ？」

息を整える間もなく、目の前の光景を疑った。

駅舎の入口には、立ち入り禁止を示す黄色の看板が掲げられている。落ち葉が散乱していた階段の上には赤いコーンがまとめられている。そして、足元には三日前にはなかった煙草の吸殻が無造作に捨てられていた。

もはやあの夕暮れの夜泉駅の雰囲気はどこにもなかった。

踏みにじられた。全てが、造作もなく、理不尽に。この廃駅が、彼女の場所が。彼女の『死』が否定された。

頭が熱い。心音がうるさい。喉が干からびて、入ってくる冷たい空気が痛い。薄の奥からどろりとした赤黒い液体のような感情が湧き上がってくる。もう随分前に忘れたはずだった、怒りという感情。

「くそっ……！」

ここで彼女が自分の『死』を待っているのだ。夜泉駅に囚われ、廃線の向こうから自分を解放してくれる何かを待っているのだ。それを奪うような真似を許すなんてできなかった。だが、それでも自分にはどうすることもできない。いくら喚いても、自分を支配している環境には抵抗にすらならない。その無力感を薄は一番よく知っていた。だから、怒ることしかできないのだ。

「あいつは……まだ、ここにいるのか？」

正面から入れないなら、廃線側から入るしかない。低い柵を乗り越え、ホームの中に入る。敷石を踏み鳴らしながらあの空虚な廃線へ。

仄蒼い闇に包まれた空間に彼女はいなかった。埃にまみれた汚いホームと赤錆びた廃線だけがそこにあった。

金色の瞳の少女はもう、いなくなってしまったのだ。

頭の中が真っ白になる。四肢の力が抜け、線路の上に膝をつく。肩に提げていた鞆の中身が散らばった。震える両手が敷石に爪を立てる。喉の奥を粘つく何かが塞いだかのように息ができなかった。

彼女は既にここを追いだされた。薄がクラスの奴らからからされたのと同じように、ここで『死』を望んだ彼女は抗うことすら許されずに、居場所を壊されてしまったのだ。

絶望が頭の中で揺れた。見せつけられるほどの無力感が目の前に、誰もいない廃線上にある。彼女にはまだここにいてほしかった。留まっていてほしかった。きっと何もできない結果は変わらなかっただろうが、あの夜と同じように彼女と話をしたかった。

薄は自分でも何故これほどまでにここを、彼女を守ろうとしているのかわからない。偶然一度会っただけのあの少女を、こんなにも。同族だったからなのだろうか、それすら理由には不確かな気がしていた。今まで知ったこともない感覚に溺れる。ここには自殺しに来ただけだったはずなのに、いつの間にか彼女に惹かれてしまっていた。

不安定な視界に散らばった鞆の中身が映っていた。

そして、その中にあのビニールの残骸を見つけた。

「そうか、ここで俺が死ねば……」

ほんの少しだけでも、工事が遅れるかもしれない。そのほんの少しでも、彼女の場所を守れるならそれでいいのかもしれない。そんな馬鹿げた想像をしながら、薄はゆっくりと立ち上がる。

薄はもう彼女のことしか考えていなかった。彼女の為に死のう。自己満足にしか終わらなくてもそれでいい。そう思って、歩き出したその時だった。

廃線の上に二本角の生えた大きな黒い獣が立っていた。

そして、その口元には見覚えのある金色の瞳を啜っていた。

#### 4

幻覚なのだろうか、これから死へ向かおうとしている自分の。

廃線上の空気が固まってしまったようだった。仄蒼い闇に佇むその獣は黒く塗りつぶされた絵画の住人のように、姿を認識できなかった。生の気配がまるでない、存在するだけの影。音もなくそれが俯きながらこちらへゆっくりと近付いてくる。口元に妖しい黄金の眼球が光っていた。

夜泉駅の化生。薄の脳裏にそんな言葉が頭をよぎる。化生の姿も金に光る眼球も薄を文字通り釘付けにした。目も口も腕も足も縫いつけられたかのように動かなかった。

やがて、薄が何もかもを思考できないうちに、獣は目の前までやってきた。そして、足元に、啜っていた金の瞳を置くと、

「ムコウニイル」

低くノイズの混ざった音のような声でそう告げた。

その刹那には、影の巨軀はぐらりと歪んで霧散した。

化生の消えた廃線に残されたのは瞳と薄。薄はその瞳を手取る。冷たいそれは、半球型のプラスチックの義眼だった。

金の瞳を胸ポケットに入れて、敷石を踏み鳴らす音と共に、薄は廃線の向こうへと歩き出した。

「向こうにいる、か」

あの獣が一体何なのかなんてわかるはずもない。ただ、幻聴だろうが幻覚だろうが、確かに聞こえたあの声に薄は言い知れないほどの確証を持ったのだ。この先に彼女がいる。自分で死ぬのは怖いと言った彼女が、廃線の向こうに。

あれが異界の化生であり、彼女を連れて行ってくれたと薄は思っていたのに。向こうにいる、だなんて。まるで自分に迎えに行かせるように仕向けたあの獣。迎えに行くつもりなんてない、ただ会いたい。それだけが、薄を歩かせた。

視界に広がるのは蒼い闇と錆びついた線路。

空虚な雰囲気、冬の香りの中に漂っていた。

足元の延々と続く廃線を辿る。

月はより高く空に飾られる。

空気はより一層冷たく、夜は深くなっていく。

まるで底の見えない深淵に降りていくようだった。

どのくらい歩いたでしょうか。まだ白い夜色の闇の中、薄は廃線が途切れた先に、朽ち果てた一両の廃棄車両を見つけた。

野晒しにされたその鉄塊は青色の塗装が剥がれ落ち、錆と苔に塗れていた。連結部分のドアは既になく、暗い中身を見せていた。

そして、その奥に見えた。あの金の瞳が。

薄は足元に散らばった虫の死骸を無視して中に入る。ぼんやりと虚空を見つめていたセーラー服の少女がこちらを向いた。彼女の右目は欠けていた。眼元は薄らと赤くなっていた。

「あ……こんばんは」

少女は少し驚いた様子だったが、微笑みながらそう挨拶をした。その笑みには、前のように無邪気なものではなく、まるで抜け殻のような作り笑いだった。そしてこちらの返事を待つことなく、続けた。

「駅……見ましたよね？」

「ああ」

「わたし、あそこにいれなくなっちゃいました」

「……」

「だから、じぶんから行こうと思ったんです。廃線の向こうに。何もなくて知ってたのに、いったら絶対後悔するってわかってたのに。わたしの求めるものは見つからないって理解していたのに。そんな時、獣に遇ったんです。影みたいな、角のある大きな黒い獣に」

少女の言葉に耳を疑う。彼女も、あの黒い獣にあっていただ。

「嬉しかったですよ、まさか本当に現れるなんて、思っていませんでしたから。だから、ありったけの思いでわたしは食べてくださいって言ったんです。そしたら、意識がなくなって一気がついたら右の義眼だけがなくなってここにいたんです。ここがどこだかなんてわかりませんでした。でも、まだこの心臓は動いていて、体は熱くて、空気は冷たくて、生きていて……あなたにもまた、会ってしまいました」

そう一度にまくしたてた少女は震えていた。俯いてしまった彼女はただ静かに泣いた。あの化生が何をしたいのかなんてわからなかった。ただ、彼女を殺さなかった、彼女は生かされた。それだけが、ここに証明されていた。

彼女は自分の夢に生殺しにされたのだ。

薄は呆然と、少女の前に歩いていく。絶望の淵に沈んでいる彼女にできることなんて、薄にはない。だからこうして、側に立つことしか思いつかなかったのだ。沈黙が降り、永い時間が過ぎていく。

不意に、柔らかい感触が薄の手を包んだ。小さな少女の両手が右手を掴んでいた。そして、彼女はそれを自分の首へ持っていった。薄の右腕がすっぽりと細い首を覆う。少女の金の瞳は飢えた亡者のように、どろりと濁っていた。

「殺して……」

か細い声が薄の耳に響く。

そうだ、それしかないのだろう。自分が心の壊れた少女にできることは、すでに何もかもが壊れている自分にできることは。せめて、彼女に望んだ『死』を上げることが自分のできる唯一だと薄は思った。

座席の上で、ゆっくりと彼女の体を横にする。その上に馬乗りになりながら、両手を首にかけ、じわりと締めた。

「……あ……………っ」

少女の口から声にならない呻きが漏れる。右手を掴んだ彼女の手は、冷たかった。月明かりの中で、細められた金色の瞳が妖しく誘う。

もっと。

「……ああっ……………！」

もっと、もっと。

吐息が混ざる。少女の舌が唾液で濡れている。苦しそうに表情を歪めても、その瞳は『死』に溺れていた。

もっと、もっと、もっと。

「……………っ！」

もう口から息は漏れない。透明な唾液が唇に垂れた。目尻には涙が浮かんでいた。締めあげる薄の手を痛みが襲う。彼女の無意識が、必死に生にしがみつこうともがいていた。薄はその痛みを耐えて、力を抜かなかった。このまま締めていれば、彼女は死ぬ。ここで、彼女は終わることができるのだ。彼女の望みを叶えてあげられる。彼女の為に、彼女を殺す。それで、ここに來た意味になる。自分が今まで死ななかつた意味になる。これから自分を殺す理由になる。全ての湧きあがった思考の塊が頭の中を掻き乱して、薄が腕にかかる力をもっと強くしようとした――その時だった。

不意に彼女の胸元に落ちた金色の義眼がこちらを見ていたのに気がついた。

その瞬間、頭の中の何もかもが弾けて消え、薄は糸が切れたように汚い床の上に倒れた。体が動かない、何も考えられない。そして、空っぽになった薄を真っ黒な感情の波が襲った。今何をしようとした？ 何をやっている？ 彼女を殺そうとしたのか？ 役立たずは何もするなよ。なんておこがましい、役立たずなんだ。自分の行為が人の為になるなんて本気で思っているのか？

どこかで聞いた罵倒と嘲笑がフラッシュバックする。冷や汗が止まらない。心臓が冷たい。眼窩から、透明な液体が溢れ出す。

喉を潰されかけて虫の息になった少女がこちらを見て、どうしてと潰れた声を上げる。

「ごめん、ごめん、俺は……俺は――――！」

薄の意識は絶叫と共に夜の闇に落ちていった。

薄が気がついたときにはすでに彼女はいなかった。

冷たい朝焼けに照らされる車両の中には、あの金の義眼と薄だけが残されていた。そして朝靄の中、逃げるように朽ちた車両を後にした。

何故彼女を殺さなかったかなんて理由はいくらでも考えられてしまうのだろう。例えば、人は元々他人を殺すことに抵抗を感じる、というくだらないもの。他にも、彼女の苦しむ顔を見たくなかったからとか何でもありだ。

だが、そんな後付けに近い理由はどうでもいい。結局、灰野薄は彼女を殺すことができなかった。

そしてあの夜の一件以後、死へ近づきすぎた薄は自分を殺すことができなくなってしまったのだ。いくら幻聴のような猜疑心に精神を掻き乱されようと、発作のように来る自責の念に押しつぶされようと、あのとき自分を動かしていた黒い衝動を感じるくらいなら耐えることができた。

そんな日々が続き、ついに薄は高校二年生になった。そして、その春、彼女と再会した。

## 十

「灰野先輩、わたしは恨んでなんかいませんよ」

放課後、教室に差し込む夕日の中で彼女は言った。

あれから彼女は少し変わったようだ。サイドテールに結んだ黒髪、そしてわざわざ黒色のカラーコンタクトを入れた両目。前のような妖しい雰囲気も受けなかった。

「あのとき殺してくれれば嬉しかったですけど、普通他人を殺すことに抵抗があるが当たり前で、申し訳ないことをさせてしまいました。ごめんなさい。それに、あれから死ぬことも怖くなってしまって、もうあそこには近づけませんでした。わたし、この目のせいで友達や家族から奇異な目で見られてて、それが嫌で、いつか消えてしまおうって思ってたんです。でも、もう少しだけ抗ってみようかと思ったんです。あんな怖いものに比べたら、現実の方がどうでもいいくらいに思えてしまって――」

馬鹿馬鹿しいですよ、と付け加えて自虐な笑みを浮かべる。そんなに一度に告白されても薄は反応に困ってしまう。だから、淡泊にそうか、とだけ呟いた。そんな薄に、彼女は頭を下げた。

「わたしの勝手な我儘につきあわせて……迷惑掛けて、すみませんでした」

「いや、俺だって雰囲気には押されていたとはいえ、あんな真似を……後遺症とか、残らなかったのか？」

「全然大丈夫ですよ。むしろ、そんなの因果応報、自業自得なんですから。灰野先輩の気にすることじゃないんです」

そこまで言われて、薄は反論する言葉を呑み込んだ。恐らく彼女も嫌というほど自分を責めたのだろう、これ以上自分の方が悪いといっても聞かないだろう。



死を望んだ二人の結末はどう転んだってろくでもない、馬鹿馬鹿しいものになるのが当然なのだ、と薄は思ってしまった。

「そういえば、なんであんた俺の名前を？」

「あ、えっと……夜泉駅に落ちていた先輩の生徒手帳を拾ったんですよ。それで、返しそびれてしまって」

「ああ、そっか。どこでなくしたかも気付かなかった」

「あ、あの、それから先輩……」

どこか俯き加減な彼女が言う。夕日に照らされた少女の顔は心なしか赤いように思えた。

「と、友達になってくれませんか……？」

あまりにも話の流れを汲まない言葉に、薄は苦笑する。

元々同族だった少女。知らない感情を自分に抱かせた少女。彼女に必要なのは自分のようなキズの舐め合いができるような相手ではないのだろうに。

そう思ったが、薄の中ではもう答えは決まっていた。

「俺は、あんたの名前を知らない」

「えっ？」

「君の名前を、聞いたことがない」

「あ、あれ……あはは。すみません、忘れてました。わたしの名前は――――」

黄昏色の空にゆっくりと静かな夜が降りてきた。

終

あとがき

今回は「何とかいつもと違う奴を描いて、更に原点回帰とか！」というコンセプトだったりしなかったり。まあそしたら登場人物が全然面白いやつらにならなかった件。いつもなら特にヒロインはまだ自分の趣味全快の電波、ヤンデレ、ツンデレ、モン娘その他いろいろの萌え要素があったりしたのに！したのに！したのに！（エコー）今回は両方人間にしようと思ったらこのざま。酷い、酷過ぎる……二度としない。

まあプロットを描かない形の方が自分に合っているということが重々わかった時点で今回も勉強になったというだけましな気分。最後なのにクオリティが低いのはもう仕方ないと思ってくださいな。ネタをもう少し柔らかい頭で考えたかったな。全盛期に戻るにはラノベも小説ももっと読むこと、そして、なによりノベルゲー（ん、別にまちがったことってないお？）をすることだ！（断定）

あとはもう少しテンポよく進めること。語彙不足、表現不足の解消。舞台とキャラクターの設

定をもう少し創りこむことだな。今更感ひどいが。

ちなみに今回の深読みしないとわからない要素は、以下

- ・主人公の性別
- ・廃線上の魔物がしていることは冒頭と同じ
- ・主人公もヒロインも巻き込まれ型。

最後に、

中二病は自らの聖遺物である。

その力を求めるなら永劫に回帰せよ、さすればいつしか創造位階へ達するだろう。

さあ、とまれ。時よ、とまれ。その逢う魔が刻の刹那に、己が全てを流出させよ。Banishment dis-world.

あ、戯言なんでw なんでも格好良さそうな単語並べてればいいと思うなよお！（自虐ネタ）

- ・キーワード：カトブレパス

以上

## 案山子 2013年冬号

<http://p.booklog.jp/book/66309>

著者：新潟大学文芸部

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sindaibungei/profile>

今回の執筆者

外衛真希 木材 Puney Loran Seapon 大山廉  
山中和明 秋月夢人 晶城氷夢華 祐輝 雨宮御波  
浦木英智 灰白湯

製本版 発行：2013年 2月 8日

電子書籍版 発行：2013年 2月 14日

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/66309>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/66309>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ